

京都府遺跡調査報告集

第151冊

1. 興戸遺跡第17次
2. 棕ノ木遺跡第9・10次

2012

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



第9次調査地遠景(南東から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、昨年度で創立30年を迎えました。また、昨年4月1日には公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターと法人名を変更いたしました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成23年度に京都府警察本部の依頼を受けて実施した興戸遺跡、平成22・23年度に京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施した椋ノ木遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、京田辺市教育委員会、精華町教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

興戸遺跡第17次

椋ノ木遺跡第9・10次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	興戸遺跡第17次	京田辺市興戸小モ詰1番、7番の1	平成23年6月20日 ～10月6日	京都府警察本部	戸原和人
2.	椋ノ木遺跡第9・10次	相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木・神ノ木他	平成22年8月20日 ～平成23年3月11日、 平成23年7月25日 ～12月16日	京都府流域下水道事務所	中川和哉・ 村田和弘・ 山崎美輪

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。
4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。
5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 興戸遺跡第17次発掘調査報告	1
2. 椋ノ木遺跡第9・10次発掘調査報告	15

挿図目次

1. 興戸遺跡第17次

第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)	1
第2図 調査トレンチ配置図	2
第3図 1トレンチ南壁土層図	3
第4図 1トレンチ遺構配置図	3
第5図 2・3トレンチ南壁土層断面図	4
第6図 2・3トレンチ検出遺構配置図	4
第7図 2トレンチ西部遺構配置図	5
第8図 4トレンチ南壁土層図	6
第9図 5トレンチ南壁土層断面図	6
第10図 4・6トレンチ遺構配置図	7
第11図 6トレンチ北壁土層図	7
第12図 5トレンチ遺構配置図	8
第13図 6トレンチN R28遺物出土状況図	9
第14図 出土遺物実測図(1)	10
第15図 出土遺物実測図(2)	11
第16図 出土遺物実測図(3)	12
第17図 出土遺物実測図(4)	13

2. 椋ノ木遺跡第9・10次

第1図 これまでの調査地と今回の調査地位置図	17
第2図 調査地位置及び精華町内主要遺跡図	18
第3図 調査地北壁土層断面図	20
第4図 第6・9次調査調査区 第1遺構面	21
第5図 第1遺構面遺構配置図	22
第6図 坪境溝SD095ほか土層断面図	23

第7図	土坑S K042遺物出土状況図	23
第8図	溝S D251五輪塔出土状況図	24
第9図	井戸S E063実測図	24
第10図	掘立柱建物跡S B 1 実測図	25
第11図	掘立柱建物跡S B 2 実測図	26
第12図	第6・9次調査調査区 第2遺構面	27
第13図	第2遺構面遺構配置図	28
第14図	古墳S X 1 周溝S D200・古墳S X 2 周溝S D201実測図	29
第15図	古墳S X 3・4 実測図	30
第16図	竪穴式住居跡S H260・264実測図	31
第17図	溝S D265実測図	32
第18図	土坑S X 134、土壘S K154・155実測図	33
第19図	噴砂実測図	34
第20図	包含層、第1・2遺構面出土遺物実測図	36
第21図	第1・2遺構面、溝S D210・251出土遺物実測図	37
第22図	五輪塔実測図(1)	38
第23図	五輪塔実測図(2)	39
第24図	古墳S X 1 周溝S D200出土遺物実測図	41
第25図	古墳S X 2 周溝S D201・S X 4 周溝S D242出土遺物実測図	42
第26図	竪穴式住居跡S H260出土遺物実測図	43
第27図	溝S D265出土遺物実測図(1)	44
第28図	溝S D265出土遺物実測図(2)	45
第29図	縄文土器実測図	47
第30図	縄文土器・石器実測図	48
第31図	第10次東壁土層断面図	51
第32図	第10次第1遺構面遺構配置図	53
第33図	井戸S E109・116、土坑S K130・153実測図	54
第34図	柱穴S P113・122実測図	55
第35図	溝S D02・105・108・115実測図	56
第36図	第10次第2遺構面遺構配置図	58
第37図	溝S D120・121実測図	60
第38図	縄文土器出土状況図	61
第39図	土器溜まりS X15・柱穴S P57出土遺物実測図	61
第40図	井戸及び柱穴出土遺物実測図	63
第41図	地境溝SD01・02出土遺物実測図	64

第42図	耕作溝群出土遺物実測図	65
第43図	古墳周溝出土遺物実測図	66
第44図	包含層出土遺物実測図	67
第45図	縄文土器実測図	68
第46図	鉄器・石器実測図	69
第47図	第4・6・9・10次平安時代・中世遺構平面図	71
第48図	第6・9・10次古墳時代遺構平面図	72

付 表 目 次

1. 椋ノ木遺跡第9・10次

付表	椋ノ木遺跡調査一覧	16
----	-----------	----

図 版 目 次

巻頭図版 椋ノ木遺跡 第9次調査地遠景(南東から)

1. 興戸遺跡第17次

図版第1	(1) 1・5トレンチ空中写真(西から) (2) 2～4・6トレンチ空中写真(上が北) (3) 5トレンチ空中写真(上が北)
図版第2	(1) 2・3トレンチ空中写真(上が北) (2) 2トレンチ西半部(東から) (3) 土坑SK34・鋤先痕(北から)
図版第3	(1) 3トレンチ溝SD03(南から) (2) 4・6トレンチ空中写真(南から) (3) 自然流路NR28遺物出土状況(南から)
図版第4	(1) 5トレンチ溝SD01(南から) (2) 5トレンチ溝SD45～47と牛足跡(南から) (3) 5トレンチ水田遺構鋤先痕・稲株痕(東から)
図版第5	(1) 出土遺物1 (2) 出土遺物2
図版第6	(1) 出土遺物3

(2)出土遺物 4

図版第 7 出土遺物 5

図版第 8 出土遺物 6

2. 棕ノ木遺跡第 9・10次

図版第 1 (1)第 9 次第 1 遺構面全景(右が北)

(2)第 9 次第 2 遺構面全景(右が北)

図版第 2 (1)第 9 次調査前(北東から)

(2)第 9 次第 1 遺構面北半部遺構検出状況(南から)

(3)第 9 次坪境溝群 S D095(西から)

図版第 3 (1)第 9 次溝 S D 251 五輪塔出土状況(西から)

(2)第 9 次土坑 S K 042 遺物出土状況(北から)

(3)第 9 次土坑 S K 042 遺物出土状況(南から)

図版第 4 (1)第 9 次第 1 遺構面南半部遺構検出状況(北から)

(2)第 9 次柱穴 S P 038 遺物出土状況(南から)

(3)第 9 次掘立柱建物跡 S B 1 検出状況(東から)

図版第 5 (1)第 9 次重機掘削(第 2 遺構面まで、北西から)

(2)第 9 次第 2 遺構面遺構検出作業(北西から)

(3)第 9 次古墳 S X 1 全景(南南東から)

図版第 6 (1)第 9 次古墳 S X 1 周溝 S D 200(南東部)遺物出土状況(北西から)

(2)第 9 次古墳 S X 1 周溝 S D 200(西部)遺物出土状況(北から)

(3)第 9 次古墳 S X 1 周溝 S D 200(西部)遺物出土状況(東から)

図版第 7 (1)第 9 次古墳 S X 1 周溝 S D 200(北西部)遺物出土状況(南から)

(2)第 9 次古墳 S X 2 全景(南東から)

(3)第 9 次古墳 S X 2 周溝 S D 201(北東部)遺物出土状況(北北西から)

図版第 8 (1)第 9 次古墳 S X 3 全景(南東から)

(2)第 9 次古墳 S X 4 全景(東から)

(3)第 9 次竪穴式住居跡 S H 260 全景(南から)

図版第 9 (1)第 9 次竪穴式住居跡 S H 260 遺物出土状況(南から)

(2)第 9 次竪穴式住居跡 S H 264 全景(北東から)

(3)第 9 次溝 S D 265 全景(北西から)

図版第 10 (1)第 9 次溝 S D 265 全景(西から)

(2)第 9 次溝 S D 265 土層断面①(西から)

(3)第 9 次溝 S D 265 土層断面②(西から)

図版第 11 (1)第 9 次溝 S D 265 遺物出土状況(西から)

- (2) 第9次土坑 S K 154 全景(東から)
 (3) 第9次土坑 S K 155 全景(東から)
- 図版第12 (1) 第9次土坑 S K 134(上面)(南東から)
 (2) 第9次土坑 S K 134(下面)(北から)
 (3) 第9次第2遺構面全景(南から)
- 図版第13 第9次出土遺物 1
- 図版第14 第9次出土遺物 2
- 図版第15 第9次出土遺物 3
- 図版第16 第9次出土遺物 4
- 図版第17 第9次出土遺物 5(縄文土器)
- 図版第18 第9次出土遺物 6(縄文土器)
- 図版第19 第10次調査第1遺構面全景(南から)
- 図版第20 第10次調査第2遺構面全景(上が南)
- 図版第21 (1) 第10次耕作溝群(西から)
 (2) 第10次耕作溝群(南から)
 (3) 第10次溝 S D 01(西から)
- 図版第22 (1) 第10次調査区北部井戸跡(東から)
 (2) 第10次井戸 S E 116(南から)
 (3) 第10次柱穴 S P 113(西から)
- 図版第23 (1) 第10次柱穴 S P 113(西から)
 (2) 第10次柱穴 S P 122(西から)
 (3) 第10次土坑 S K 166(南から)
- 図版第24 (1) 第10次土坑 S K 130(西から)
 (2) 第10次土坑 S K 153(南から)
 (3) 第10次坪境溝 S D 02(東から)
- 図版第25 (1) 第10次坪境溝 S D 02断面(西から)
 (2) 第10次坪境溝 S D 02断面(西から)
 (3) 第10次溝 S D 115(東から)
- 図版第26 (1) 第10次溝 S D 115(北から)
 (2) 第10次溝 S D 115断面(西から)
 (3) 第10次溝 S D 105・108遺物出土状況(西から)
- 図版第27 (1) 第10次溝 S D 105・108断面(東から)
 (2) 第10次古墳周溝 S D 127(北から)
 (3) 第10次古墳周溝 S D 127(東から)
- 図版第28 (1) 第10次古墳周溝 S D 127内遺物出土状況(南東から)

- (2) 第10次古墳周溝 S D 127断面(東から)
- (3) 第10次古墳周溝 S D 120・121(北東から)
- 図版第29 (1) 第10次古墳周溝 S D 120・121(西から)
- (2) 第10次古墳周溝 S D 121内遺物出土状況(西から)
- (3) 第10次古墳周溝 S D 121内遺物出土状況(南から)
- 図版第30 (1) 第10次古墳周溝 S D 120内遺物出土状況(南西から)
- (2) 第10次古墳周溝 S D 120断面(南西から)
- (3) 第10次古墳周溝 S D 120断面(西から)
- 図版第31 (1) 第10次古墳周溝 S D 129内遺物出土状況(南から)
- (2) 第10次第2遺構面確認調査区(北から)
- (3) 第10次第2遺構面確認調査区断面(東から)
- 図版第32 (1) 第10次第2遺構面確認調査区断面焼土(西から)
- (2) 第10次調査区南端土層確認用サブトレンチ(西から)
- (3) 第10次調査区北部縄文土器出土状況(西から)
- 図版第33 第10次出土遺物 1
- 図版第34 第10次出土遺物 2

1.興戸遺跡第17次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、京都府田辺警察署の耐震改修工事に伴うもので、京都府警察本部の依頼を受けて実施した。調査対象地は、現在の京都府田辺警察署敷地内とその南側で、西側に山並みが迫り、西から東に地形が下る丘陵の裾部にあたる。

過去の興戸遺跡の調査では、弥生時代の溝、古墳時代の堅穴式住居跡・溝・貯蔵穴状の土坑や奈良・平安時代の掘立柱建物跡が検出されている。また、調査対象地は、奈良時代の古山陰道・山陽道を踏襲していると考えられている府道木津八幡線の西に隣接しており、関連遺構が包蔵されているものと想定された。また、今回の調査地の西側には興戸廃寺が想定されており、関連する遺構・遺物の検出が期待された。

調査対象地は、田辺警察署の敷地と旧京都府農業研究所の敷地にまたがるため、まず、敷地境をはる水路を挟んで細長い調査区を設定し、調査成果等を確認し、関係機関と協議をおこなった上で、その北西側について必要な範囲を調査をすることとした。

平成23年6月20日に樹木伐採等に着手し、23日から1・5トレンチの重機掘削を開始した。その結果、古墳時代～中世にかけての遺構が分布していることが判明した。

8月4日に関係機関と協議を行い、1・5トレンチ周辺の調査を進めることを確認した。その後、8月8日から2・3・4トレンチを重機で掘削し、あわせて1・5トレンチの埋め戻しを実施した。8月30日から6トレンチの重機掘削を行った。9月22日には関係者説明会を開催し、7名の方の参加を得た。9月29日から10月4日まで重機により埋め戻しを行い、その後、機材の撤出・事務所の撤去を経て、6日に現地の引き渡しを行い、現地調査を完了した。なお、調査に係る経費は、全額京都府警察本部が負担した。

調査を進めるにあたり、京都府教育委員会をはじめ、京田辺市教育委員会、京都府警察本部、京都府田辺警察署などの関係機関のご指導、ご協力を得た。また、興戸区自治会や京田辺市立田辺中学校、社会福祉法人京都聴覚言語障害福祉協議会などの地元の方々からは多大なご協力をいただいた。記して、感謝したい。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

〔調査体制等〕

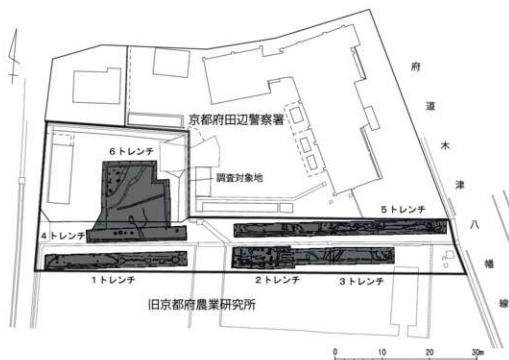
現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克
 調査担当者 調査第2課調査第2係長 岩松 保
 同 主任調査員 戸原和人
 調査場所 京田辺市興戸小モ詰1番、7番の1
 現地調査期間 平成23年6月20日～10月6日
 調査面積 600㎡

2. 検出遺構

調査地の地形は西から東に下がっており、地表面の標高は、6トレンチで37.4m、1トレンチで37.2m、同5トレンチで35.8mを測る。基盤となる地層については、現在の地表下～1mまでが盛土層・沖積層(砂礫質土層、粘性土層)、1～3mまでが沖積層(粘性土層)、それで深が大阪層群(砂・礫質土層)との報告があり(田辺警察署耐震改修工事ボーリング調査)、今回の調査では、いずれのトレンチでも沖積層の粘性土層や砂礫質土層内で遺構を検出した。

1) 1トレンチ(第2～4図) トレンチの西半では、第8層の上面で近世以降の耕作に伴う溝、第12層上面で奈良・平安時代、第13層上面では古墳時代の遺構を検出した。

トレンチの東半部は、現地地表下1m(標高35.2～35.4m)まで現代の攪乱が及んでおり、第12・13層は土層断面だけで確認した。その後、下層の断ち割りを行った結果、標高35.4m付近では第22層の黒色シルトが沼状に水平堆積していた。第13層以下第23層にいたる土層はおおむね砂・砂礫を中心としたものであり、扇状地性の堆積と考えられる。

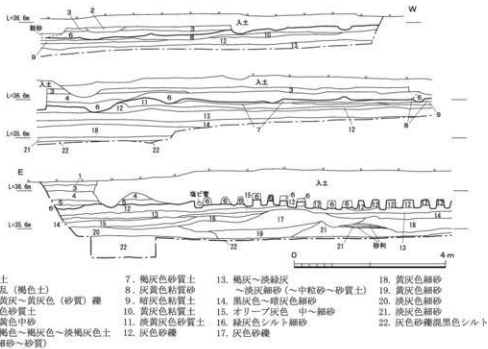


第2図 調査トレンチ配置図

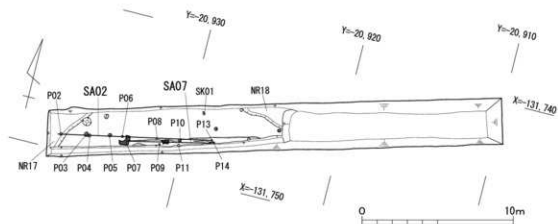
調査地の西半部では奈良・平安時代の柱列(SA02・07)と古墳時代の流路跡(NR17)、中央部で古墳時代の流路跡(NR18)を検出、東半部は現代の攪乱により遺構面は消失していた。

欄列SA02 調査地西半部で検出した柱間6間以上の柱列である。10m分を検出した。柱穴の掘形は直径30～40cm、深さ30cmを測り、柱間の距離は西から1.7m、1.5m、0.7m、2.4m、1.5m、2.1mと不揃いである。一列しか検出しなかったため欄列に復元したが、複数の建物跡の可能性がある。主軸は座標北に対してN-11.5°-Wを測る。柱穴から第14図1・2の須恵器、灰軸陶器が出土した。

欄列SA07 SA02に並行して検出した。SA02の柱穴に切られており、SA02に先行した欄列である。柱間3間以上を検出し、柱間の距離は西から2.1m、1.2m、2.1mと不揃いであることから、複数の建物跡の可能性がある。柱穴から(第14図3)の須恵器杯が出土した。



第3図 1トレンチ南壁土層図



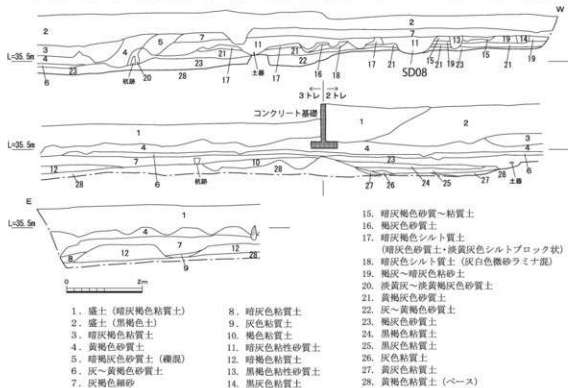
第4図 1トレンチ遺構配置図

流路NR17 調査地の西端で検出した。南西から北東に向かって流れる自然流路の一部である。幅0.85m、深さ0.2mを測り、長さ3.5m分を検出した。黒褐色粘質土を埋土としており、東肩部より土師器甕(第14図12)が出土した。

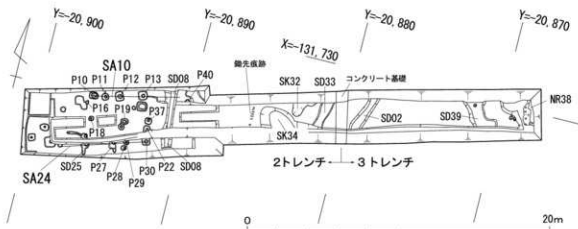
流路NR18 調査トレンチの中央部で検出した。幅1.5m、深さ0.25mを測る。検出状況が同じであることから、流路NR17とつながる可能性がある。

2) 2トレンチ(第2・5～7図)

2・3トレンチの現地表面は、約50cmの比高がある。第1・2層の盛り土層下には、第7層があり、2トレンチの中央部やや東で約0.7～1mの層厚で東側に下り、第3～5層が堆積する。この中央部の西と東で遺構を検出した層位が異なり、西側では第19・21・23層の上面で奈良時代



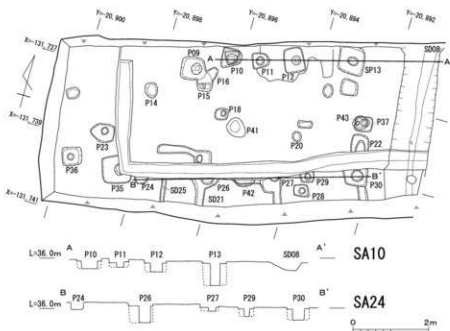
第5図 2・3トレンチ南壁土層断面図



第6図 2・3トレンチ検出遺構配置図

の遺構を検出した。東側では第7層上面で中世以降の耕作溝、その下層の第28層上面で古墳時代の土坑と水田跡(鋤先痕)を検出した。

調査地の西半部では奈良時代の柱穴と溝を検出した。柱穴が南・北・西の壁面にかかっていたため、それぞれ一部を拡張して遺構の検出に努めた。



第7図 2トレンチ西部遺構配置図

柱列 SA10 調査地西部北辺で検出した、東西方向の柱列である。柱穴の掘形は隅丸方形で、一辺50～70cm、深さ20～60cmを測る。掘立柱建物跡の一部と考えられるが、柱掘形の大きさや深さが異なっており、複数の建物跡の可能性もある。主軸はN115°Wを測る。柱穴から須恵器杯B(第15図39)、土師器甕(第15図40)、平瓦(第16図64)が出土した。

柱列 SA24 調査地西部南辺で検出した、東西方向の柱列である。柱穴の掘形は隅丸方形で、一辺50～70cm、深さ20～57cmを測る。P30より須恵器杯(第15図41)が出土した。

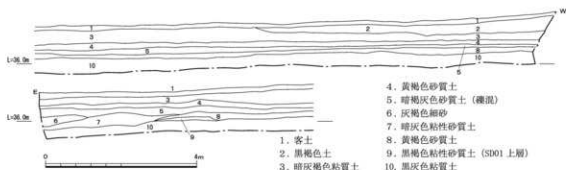
溝 SD08 調査地西部の柱列 SA10・24の東で検出した。埋土は第11層の暗灰色粘性砂質土である。幅0.9～1m、深さ25cmで、長さ4mにわたり検出した。溝の方位はN8°Wを測る。溝内から須恵器杯・蓋・壺、土師器甕などが出土した(第15図26～38・63)。

土坑 SK32 調査地東寄りの北壁付近で検出した。東西・南北とも50cmを測り、北に広がる。5トレンチで検出したSD01の延長部にあたり、大きく削平を受けているため、深さ数cmを検出したのみである。埋土から須恵器壺底部が出土した(第15図43)。

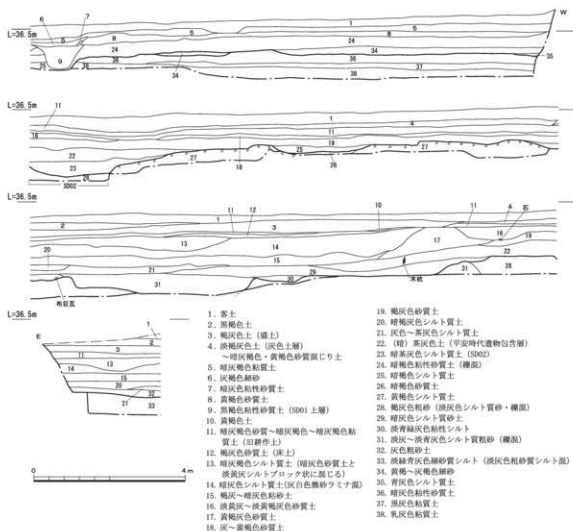
溝 SD33 調査地の東端で検出した。幅0.3m、深さ10cmで、長さ2m分を検出した。3トレンチSD02と並走し、溝の方位はN10°Eを測る。埋土から瓦器片が出土した。

土坑 SK34 SK32の南で検出した。トレンチの南壁で幅5.2m、深さ30cmを測り、南に広がる。古墳時代の小型丸底壺(第17図93～95)が出土した。土坑の西側では、連続した鋤先痕と考えられる三日月形の凹みを検出した。同様の痕跡は、5トレンチの水田遺構でも検出した。

3) 3トレンチ(第2・5・6図) 3トレンチは2トレンチの東半部と同じ層序で、第7層上面で中世以降の耕作溝、その下層の第12・28層上面で奈良・平安時代の溝を検出した。調査地の東は地形が一段低くなっており、東端では中世以降の護岸の杭が打ち込まれた段差と沼状の粘土



第8図 4トレンチ南壁土層断面図

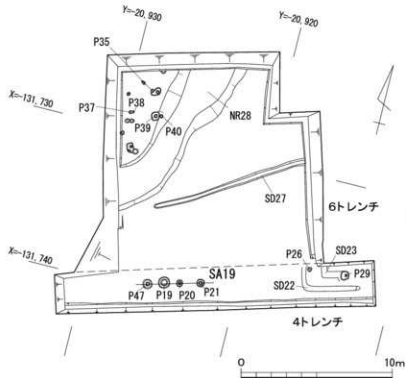


第9図 5トレンチ南壁土層断面図

層(第8層: NR38)を確認した。

溝SD02 調査地の西端で検出した。幅0.7m、深さ0.3m、検出長は3mで、方位はN22°Eを測る。溝内からは平安時代末～鎌倉時代の瓦器碗や灰釉陶器(第14図13)などが出土した。埋土は第25層である。

溝SD39 調査地の東で検出した。幅1.2m、深さ30cmを測り、南北2.6mを測る。溝の方位は



第10図 4・6トレンチ遺構配置図



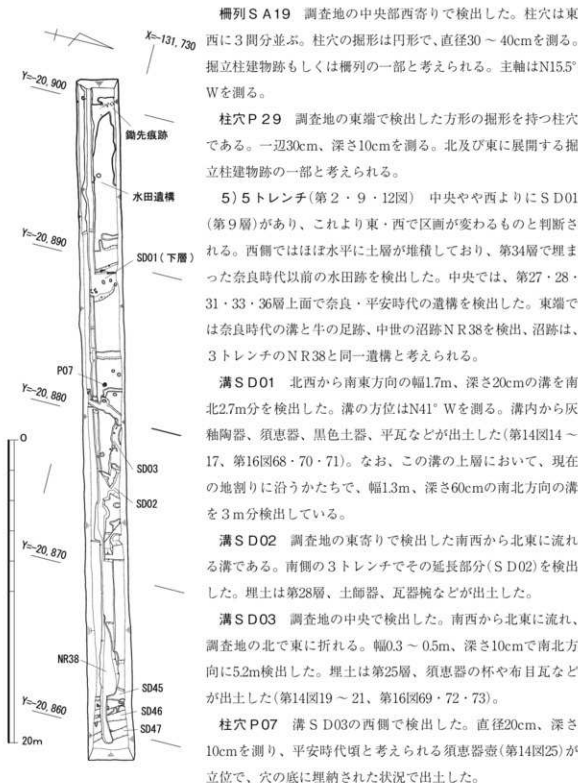
第11図 6トレンチ北壁土層図

N36.5° Wを測る。埋土は第9層である。

流路NR38 調査地の東端で西の肩部を検出した。幅1.7m以上、深さ50cmを測り、南北3.6m分を検出した。肩部には杭が打ち込まれ、杭と杭の間には同材の木を渡して護岸としている。埋土は第8層で、瓦器碗の破片が出土した。

4) 4トレンチ(第2・8・10図) 4トレンチでは第8層上面で中世以降の柱穴・溝、第10層上面で奈良時代の柱穴などを検出した。

溝SD22・23 調査地の東端近くで検出した。北から東に直角に折れる、並行する2条の溝である。SD22が検出長4.5m、SD23が検出長2.0mで、ともに幅20～40cm、深さ5cmを測る。耕作に伴う溝と考えられる。溝内から瓦器片が出土した。



第12図 5トレンチ遺構配置図

溝である。溝の幅は30～50cm、深さ10cm程度である。溝の埋土(灰色粗砂土)から布目瓦が出土した。また、S D 45周辺で、灰色粗砂土で埋まった牛の足跡を検出した。

水田遺構 トレンチ西端部で、第34層によって埋まった畦状遺構のほか鋤先でつけられたと考えられる連続した三日月形の凹みや不定形の稲株痕跡を検出した。出土遺物はないが、層位が奈

溝列 S A 19 調査地の中央部西寄りで検出した。柱穴は東西に3間分並ぶ。柱穴の掘形は円形で、直径30～40cmを測る。掘立柱建物跡もしくは溝列の一部と考えられる。主軸はN15.5° Wを測る。

柱穴 P 29 調査地の東端で検出した方形の掘形を持つ柱穴である。一辺30cm、深さ10cmを測る。北及び東に展開する掘立柱建物跡の一部と考えられる。

5) 5トレンチ(第2・9・12図) 中央やや西よりに S D 01(第9層)があり、これより東・西で区画が変わるものと判断される。西側ではほぼ水平に土層が堆積しており、第34層で埋まった奈良時代以前の水田跡を検出した。中央では、第27・28・31・33・36層上面で奈良・平安時代の遺構を検出した。東端では奈良時代の溝と牛の足跡、中世の沼跡 N R 38を検出、沼跡は、3トレンチの N R 38と同一遺構と考えられる。

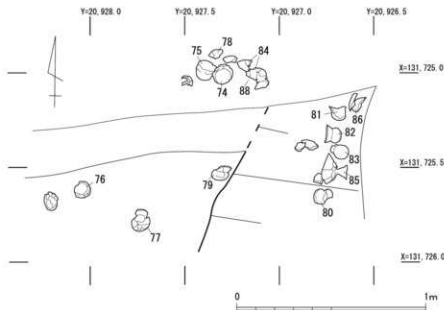
溝 S D 01 北西から南東方向の幅1.7m、深さ20cmの溝を南北2.7m分を検出した。溝の方位はN41° Wを測る。溝内から灰釉陶器、須恵器、黒色土器、平瓦などが出土した(第14図14～17、第16図68・70・71)。なお、この溝の上層において、現在の地割りに沿うかたちで、幅1.3m、深さ60cmの南北方向の溝を3m分検出している。

溝 S D 02 調査地の東寄りで検出した南西から北東に流れる溝である。南側の3トレンチでその延長部分(S D 02)を検出した。埋土は第28層、土師器、瓦器碗などが出土した。

溝 S D 03 調査地の中央で検出した。南西から北東に流れ、調査地の北で東に折れる。幅0.3～0.5m、深さ10cmで南北方向に5.2m検出した。埋土は第25層、須恵器の杯や布目瓦などが出土した(第14図19～21、第16図69・72・73)。

柱穴 P 07 溝 S D 03の西側で検出した。直径20cm、深さ10cmを測り、平安時代頃と考えられる須恵器壺(第14図25)が立位で、穴の底に埋納された状態で出土した。

溝群 S D 45・46・47 トレンチ東端で検出した3条の細い溝である。溝の幅は30～50cm、深さ10cm程度である。溝の埋土(灰色粗砂土)から布目瓦が出土した。また、S D 45周辺で、灰色粗砂土で埋まった牛の足跡を検出した。



第13図 6トレンチNR28遺物出土状況図

良時代の遺構検出面(第36層上面)の下に位置するため、奈良時代以前と考えられる。

6) 6トレンチ(第10・11・13図) 6トレンチでは第14層上面で古墳時代前期の流路跡、奈良・平安時代の溝、柱穴を検出した。

柱穴P35・39 調査地の北西部で検出した隅丸方形の柱穴で、一辺50～70cmを測る。南北方向に柱筋を揃えて並んでいることから掘立柱建物跡もしくは柵列の一部と考えられる。

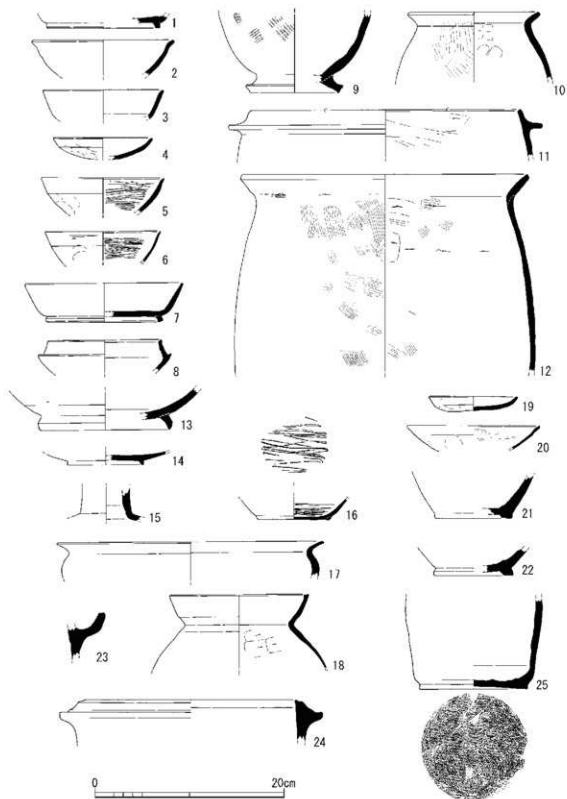
溝SD27 調査地の中央部で検出した東西方向の溝である。幅0.4m、深さ5cm、長さ10.5m分を検出した。溝の方位はN30°W、遺物は確認されなかった。

流路NR28 調査地の北西部で検出した、南西から北東に流れる流路跡である。流路は埋土の堆積状況から2時期に分けられる。上層は第12図第1～6層の砂層を主体とする。下層は第12図第9～13層の砂礫土及び砂質土からなる。基盤面となる第14層上面で検出した古墳時代以降の流路は、検出幅約2.5～4.0m、深さ1m以上、総延長24mを測る。トレンチ北壁隅部の流路の西屑部において、古墳時代の小型丸底壺、高杯、甕(第17図74～88)がほぼ、1～2mの範囲からまとまって出土した。これらの土器はほとんど完形に近いものばかりであり、二次的な移動は考えにくい状況にある。

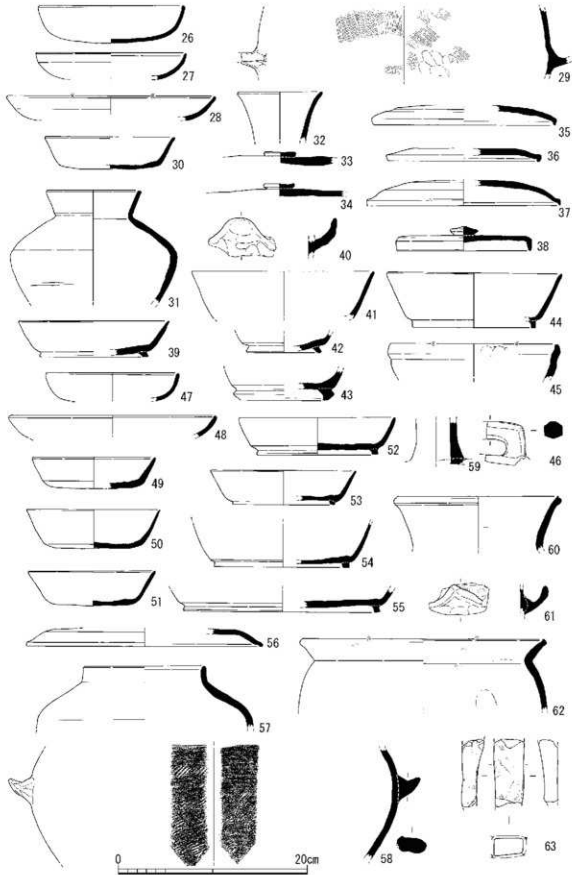
3. 出土遺物

各トレンチから古墳時代の土師器・須恵器、奈良・平安時代の土師器皿・甕、須恵器杯身・杯蓋・灰軸陶器・平瓦、中世の瓦器椀・羽釜・青磁・白磁などが整理箱6箱分出土した。以下主な出土遺物について報告する。

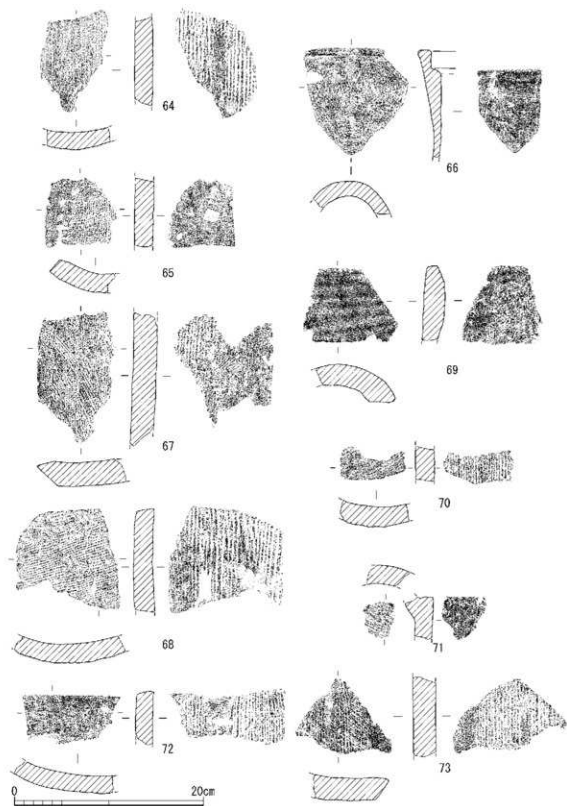
1) 1トレンチ(第14図) SA02を構成する柱穴P08内より須恵器杯B(1)が、P13内より灰軸陶器椀(2)が出土している。SA07を構成する柱穴P07内より須恵器杯(3)が、NR17より土師器甕(12)が出土している。



第14図 出土遺物実測図(1)



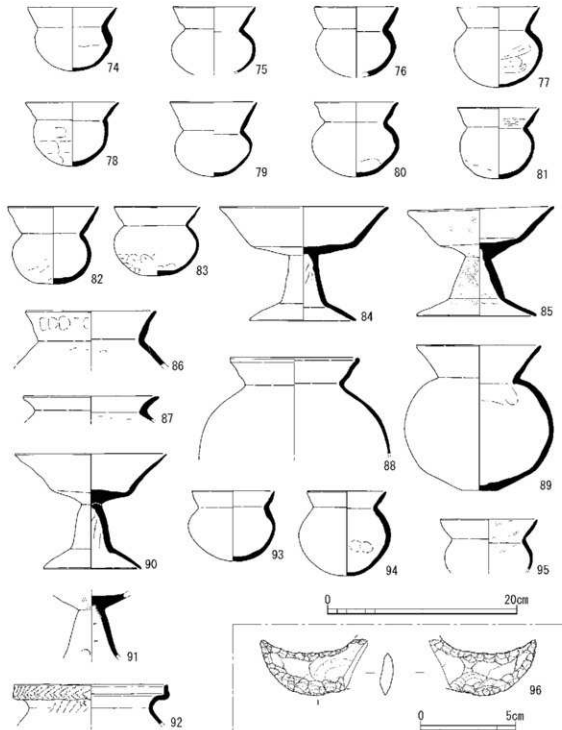
第15図 出土遺物実測図(2)



第16図 出土遺物実測図(3)

包含層中より黒色土器B類椀(5・6)、須恵器杯B(7)、同壺(9)、土師器甕(10)、瓦質羽釜(11)、古墳時代の須恵器杯身(8)が出土している。

2) 2トレンチ(第15・16図) S D08より土師器杯A(26・27)、同皿(28)、同把手付甕(29)、須恵器杯A(30)、同壺(31・32)、同杯蓋(33～37)、同壺蓋(38)、砥石(63)などが出土している。S A10を構成する柱穴P13内より須恵器杯B(39)、土師器甕把手(40)、平瓦(64)が出土している。



第17図 出土遺物実測図(4)

S A24を構成する柱穴P30内より須恵器杯(41)、柱穴P22より須恵器杯B(42)、P40より須恵器杯B(44)、P35より製塩土器(45)、P37より平瓶の把手(46)、土坑SK32より須恵器壺底部(43)が出土している。包含層中より土師器杯(47)、同皿(48)、須恵器杯A(49～51)、同杯B(52～54)、同皿B(55)、同蓋(56)、同壺(57・58・60)、同高杯(59)、土師器甕の把手(61)、同甕(62)、平瓦(65)、瓦製の土管(66)、SK34より小型丸底壺(93～95)などが出土している。

3) 3トレンチ(第14・17図) SD02より10世紀の灰軸陶器壺の底部(13)が、包含層中より弥生時代の安山岩製石小刀(96)などが出土している。

4) 4トレンチ(第16・17図) 4トレンチ包含層中より古墳時代の土師器高杯(90・91)、弥生土器の甕(92)、平瓦(67)などが出土している。92は受口状の口縁をもち、口縁端面に縞掘きの羽状文を施していることから、いわゆる近江系の甕と考えられる。

5) 5トレンチ(第14・16図) SD01より9世紀の灰軸陶器皿の底部(14)、須恵器壺の頸部(15)、黒色土器A類の杯B(16)、須恵器の鉢(17)、古墳時代の布留式甕(18)、平瓦(68・70・71)などが出土している。SD03より土師器皿(19・20)、10世紀の灰軸陶器壺の底部(21)、丸瓦(69)、平瓦(72・73)などが出土している。P07内より糸切り底の須恵器壺(25)が出土している。包含層中より9～10世紀の灰軸陶器壺の底部(22)、土師器甕の把手(23)、同羽釜(24)などが出土している。

6) 6トレンチ(第17図) NR28の北壁付近西側肩部と流路内より古墳時代前期の小型丸底壺(74～83)・高杯(84・85)・甕(86～88)が出土した。これらは、いずれも器壁の磨減が激しく、粘土紐の痕跡を残すもの(74)や口縁部を強いヨコナデで仕上げるもの(79)、脚柱部内面に絞り痕を残すもの(84)など、粗雑な仕上げで共通する。SK34の土器群(93～95)とともに一括性の高い一群である。なお、トレンチの北東部では、底部が平底気味の壺(89)が単独で出土した。

4. まとめ

奈良、平安時代について、5トレンチの溝SD01が座標北に対してN41°W振れ、東端で検出した溝SD45～47がN31～33°W振れることから、これらの溝群が奈良時代の古山陰道・山陽道を踏襲していると考えられている府道木津八幡線(N34°W振れ)とはほぼ並行しており、調査地周辺に当時の道路を基準にした地割りがあった可能性が考えられる。

また、出土遺物には布目瓦・灰軸陶器など、一般の集落ではあまり出土しないものが含まれており、調査地周辺に想定されている興戸廃寺の存在を考える上で貴重な成果といえよう。

古墳時代の流路NR28から出土した土器群はその出土状況や土器の特徴などから一括性の高いものといえ、調査地周辺にも同時期の土坑等が確認されていることから、古墳時代前期の集落が近在した可能性が高いといえる。

(戸原和人)

2. 椋ノ木遺跡第9・10次発掘調査報告

はじめに

椋ノ木遺跡は京都府相楽郡精華町大字下貮小字椋ノ木・神ノ木他に所在する縄文時代から中世の集落遺跡である。椋ノ木遺跡の包蔵地の大部分が現在の木津川上流浄化センター敷地内に含まれる。発掘調査は、木津川上流浄化センター関連の建設工事に伴って平成7年度に実施した調査から数えて今回報告する平成23年度調査まで10次にわたる調査が実施された(付表)。

今回報告する平成22・23年度の発掘調査は、木津川上流浄化センター(水処理施設)増設工事に先立って京都府流域下水道事務所の依頼により実施した。

平成22年度調査の整理報告は村田・中川が行い、平成23年度調査の整理報告は中川・山崎が行った。現地調査にあたり、京都府教育委員会、精華町教育委員会ならびに木津川上流浄化センター、地元舟区・里区・西北区の方々には多大なご助言・ご協力を得た。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額京都府流域下水道事務所が負担した。

〔調査体制等〕

平成22年度調査(第9次調査)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸
調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司
調査第3係専門調査員 竹井治雄・石尾政信
同 調査員 村田和弘
調査第1係主査調査員 柴 暁彦
調査第2係調査員 古川 匠

調査場所 相楽郡精華町大字下貮小字椋ノ木・神ノ木他

現地調査期間 平成22年8月20日～平成23年3月11日

調査面積 2,500㎡

平成23年度調査(第10次調査)

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克
調査担当者 調査第2課調査第2係長 岩松 保
同 主任調査員 中川和哉
調査第3係専門調査員 石尾政信
同 調査員 山崎美輪

調査場所 相楽郡精華町大字下貮小字椋ノ木・神ノ木他

現地調査期間 平成23年7月25日～12月16日

調査面積 1,300㎡

これまでの調査と周辺遺跡

椋ノ木遺跡は三重県を源流とする一級河川である木津川の左岸にあたり、自然堤防上に立地する縄文時代から中世に至る複合遺跡である。これまでの調査で出土した最も古い土器は、縄文時代中期末の北白川C式土器である。そのほかに、沈線文系の後期の土器片、晩期滋賀Ⅲa式、船橋式土器、長原式土器が出土している。第5次調査では翡翠製の玉珠が1点出土している。また、縄文時代の石器である石匙が精華町大福寺遺跡・畑ノ前遺跡でも出土していることから、今後、町内において、さらに縄文時代の遺跡が増える可能性がある。

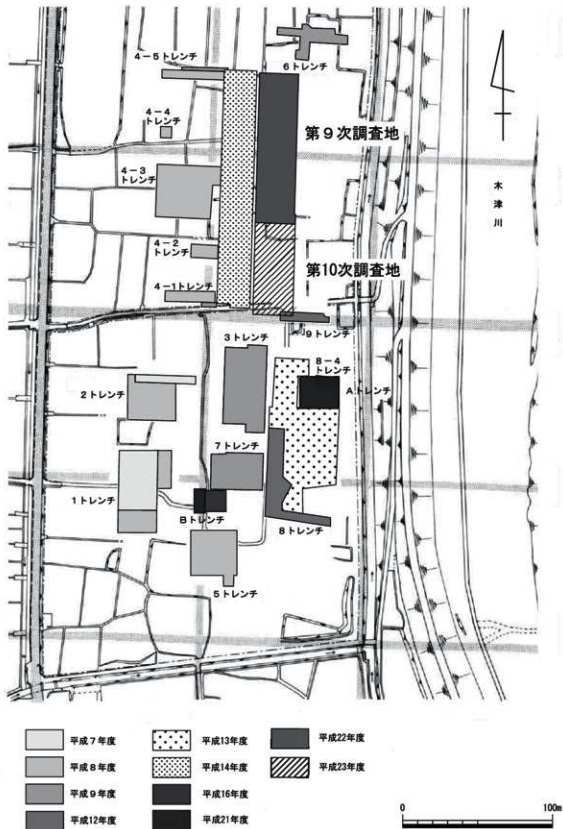
遺跡内では遺構に伴うものではないが、弥生時代前期末の土器片が出土している。第9次調査では溝内から前期の土器片が出土している。同じ時期の遺物は、椋ノ木遺跡北側の河川敷内にある百久保地先遺跡においても土器が出土しており、現在の木津川に近接した場所に弥生時代前期の集落が存在していた可能性が指摘できる。弥生時代中期の遺物は、椋ノ木遺跡第6次調査で検出した溝中から中期後葉の土器が後期の土器とともに出土している。同時期の遺跡には畑ノ前遺跡、大福寺遺跡、乾谷遺跡、祝園遺跡、森垣外遺跡があり、遺跡は丘陵上、丘陵裾部、河川隣接地の3種類の立地の違いが認められる。後期の遺物としては、椋ノ木遺跡第6・9次調査で同一の溝から土器片が出土している。

古墳時代の前期から中期前葉にかけての竪穴式住居跡が、第4次調査の8トレンチ及び隣接する第5次調査地で発見されている。また、今回報告の第9次調査でも竪穴式住居跡が2棟検出されている。この時期の集落は、遺跡の中でも木津川に近い東側に偏在している。町内では柿添遺跡で、遺物の出土を見ている。その他の集落遺跡の様相は不明であるが、前期から中期前葉の古墳は鞍岡山古墳群、平谷古墳群、北尻遺跡などでみられる。三角縁神獣鏡が多量に出土した古墳時代前期の前方後円墳として有名な椿井大塚古墳が木津川対岸に存在している。

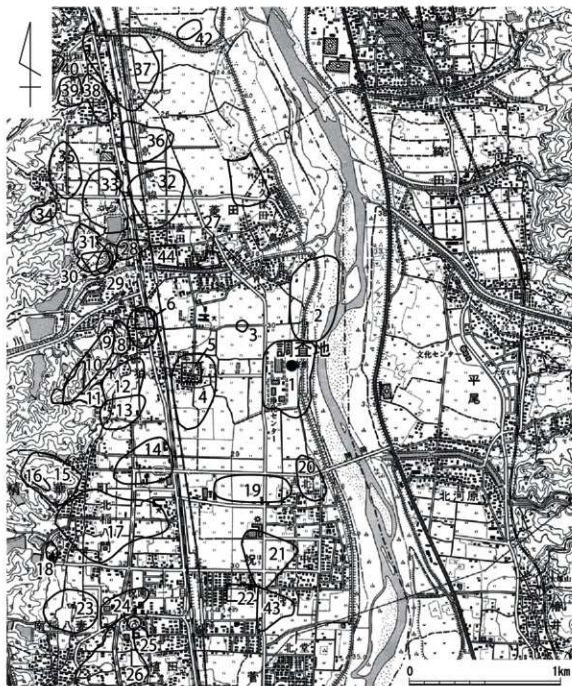
古墳時代中期末から後期にかけては、椋ノ木遺跡の北東部に古墳がまとも検出されており、古墳群が形成されている。古墳の溝と考えられる遺構から埴輪片も出土している。椋ノ木遺跡に

付表 椋ノ木遺跡調査地一覧

調査 回数	調査期間	調査区数	調査面積	文 献
1	平成7年11月21日～平成8年2月27日	2	1,200㎡	京都府遺跡調査概報第81冊(1998)
2	平成8年5月28日～平成9年2月27日	9	4,700㎡	
3	平成9年5月6日～平成9年11月7日	5	2,850㎡	京都府遺跡調査概報第85冊(1998)
4	平成12年12月18日～平成13年3月5日	2	1,100㎡	京都府遺跡調査概報第101冊(2001)
5	平成13年6月13日～平成14年2月1日	1	3,400㎡	京都府遺跡調査概報第105冊(2002)
6	平成14年6月5日～平成15年2月10日	1	3,200㎡	京都府遺跡調査概報第110冊(2004)
7	平成16年8月18日～平成16年10月1日	1	300㎡	京都府遺跡調査概報第115冊(2005)
8	平成21年11月26日～平成22年3月4日	1	500㎡	京都府遺跡調査報告集第143冊(2011)
9	平成22年8月20日～平成23年3月11日	1	2,500㎡	本報告
10	平成23年7月25日～平成23年12月16日	1	1,300㎡	



第1図 これまでの調査地と今回の調査地位置図



- | | | | |
|-----------------|------------|------------|------------|
| 1. 椋ノ木遺跡・椋ノ木古墳群 | 12. 下馬遺跡 | 23. 南稻遺跡 | 34. 白山遺跡 |
| 2. 百久保地先遺跡 | 13. 片山遺跡 | 24. 北尻遺跡 | 35. 屋敷田遺跡 |
| 3. 石ヶ町遺跡 | 14. 柿添遺跡 | 25. 祝園遺跡 | 36. 桑町遺跡 |
| 4. 里遺跡 | 15. 城山遺跡 | 26. 森垣内遺跡 | 37. 宮ノ下遺跡 |
| 5. 里廃寺 | 16. 城山古墳群 | 27. 春日神社遺跡 | 38. 佐牙垣内遺跡 |
| 6. 下狛城館跡 | 17. 北稻遺跡 | 28. 西ノ口遺跡 | 39. 三山木廃寺 |
| 7. 押殿遺跡 | 18. 国名平古墳群 | 29. 薬師寺跡 | 40. 芝山遺跡 |
| 8. 鞍岡山遺跡 | 19. 西垣内遺跡 | 30. 平谷古墳群 | 41. 木原城館跡 |
| 9. 鞍岡神社遺跡 | 20. 祝園神社遺跡 | 31. 薬師山遺跡 | 42. 煙道遺跡 |
| 10. 鞍岡山古墳群 | 21. 中垣内遺跡 | 32. 山路遺跡 | 43. 古屋敷遺跡 |
| 11. 大福寺遺跡 | 22. 城ノ内遺跡 | 33. 宮ノ口遺跡 | 44. 前川原遺跡 |

第2図 調査地位位置及び精華町内主要遺跡図

おいては、同時期の遺構は古墳以外のものは発見されていない。町内における同時期の集落として、森垣外遺跡が注目される。大型の住居跡や方形区画などの存在から在地首長の居住地と考えられる。また、韓式土器の存在などが注目されている。後期の古墳には丘陵部に立地する平谷古墳群、鞍岡山古墳群、畑ノ前古墳群、畑ノ前東古墳群、城山古墳群などがあるが、出土遺物の年代観から、椋ノ木遺跡の古墳より新しい時期に造られたことがわかる。

椋ノ木遺跡内では、白鳳期の木津川市高麗寺と同じ型式の軒丸瓦が中世の遺構から出土している。遺跡内では白鳳期の遺構は検出されていないが、これまでの調査では、どの調査地点でも少量ではあるが奈良・平安時代と考えられる布目瓦片が出土し、遺跡全体に広く分布している状況である。椋ノ木遺跡内では、奈良時代に属すると考えられる鬼瓦片、平安時代後半から中世にかけての巴文軒丸瓦が出土している。瓦の出土量はわずかで、本格的な瓦葺建物が周辺に存在していた可能性は低い。遺跡から西に約400m離れた場所には里麻寺があり、高麗寺系の軒丸瓦や平城宮式・恭仁宮式の瓦が出土していることから、椋ノ木遺跡で出土する少量の瓦は里麻寺からもたらされた可能性がある。そのほかにも、畑ノ前遺跡では稲蜂間氏の館と想定されている館跡が検出されている。

平安時代後期に入ると、第6次調査地で東西6間以上、南北2間の身舎に南北に庇がつく大型の建物が検出されている。今回報告する第9次調査においても大型の建物が検出されており、その性格が注目される。町内では、椋ノ木遺跡から西に約1km離れた位置に下狛麻寺があり、発掘調査で平安時代後期の瓦が出土している。

平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構は椋ノ木遺跡で多く検出されており、その範囲は発掘調査を実施した地区全体に及んでいる。遺構には掘立柱建物跡、土墳墓、耕作溝、坪境溝がある。現在残されている地割に沿った方向の溝が確認できる。中世の遺構は、14世紀中頃以降のものは認められなくなる。集落は別の場所に移り、耕作地として利用されたものと考えられる。

椋ノ木遺跡から約500m南には祝園神社が存在する。神社は大元(806)年の記録が「新抄格勅符抄」に記載されており、平安時代初期から存在していたことがわかる。その後、もみじの名所として「更級日記」に登場し、平安時代末の歌人藤原定家にも詠まれ、「新古今和歌集」に収録されている。祝園神社には神宮寺である薬師寺が併設されており、明治期の神仏分離運動の中、他寺へ移された平安時代前期の菩薩形をした薬師如来立像が祀られていた。椋ノ木遺跡の平安時代から中世にかけての集落は、祝園荘に存在する祝園神社・薬師寺と同時代に共存していた。

平安時代以降に関しては、歴史地理学者の足利健亮氏によって、木津川沿いに祝園神社の脇をかって京都・大阪方面から奈良にいたる道路が復元されている。

近世に入ると、祝園地区と対岸の木津川市平尾を結ぶ開の渡し、下狛舟と対岸の木津川市綺田を結ぶ藪の渡しがあり、郡山街道と奈良街道を結んでいた。椋ノ木遺跡はそれら2つの渡しの中間に位置している。また、現在の木津川上流浄化センター敷地の中央を東西に走る道は、遺跡西方にある里集落の中軸から真東西方向に伸び、木津川の浜に至る「浜道」として利用されてきた。

(中川和哉)

(1) 第9次調査(平成22年度)

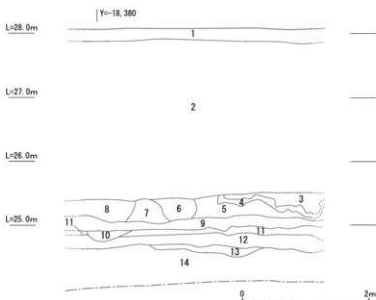
1. 調査の概要

第9次調査は、木津川上流流域下水道木津川上流浄化センター内の精華町立体倉庫・コミュニティセンターの東隣にあたり、水処理施設の増設に伴う事前の発掘調査である。

現地調査では、平成22年2月5日に現地説明会を実施し、146名の参加を得た。整理作業および報告書作成は平成23年度に実施し、中川と村田が分担して執筆した。

第9次調査地は、平成14年度に実施した第6次調査地の東隣接地である。調査は、遺構面までを重機で掘削した。現地表面である標高約28mから、標高約25.5mまでは現代の造成土が堆積していた。その直下では浅黄褐色粘質土(第3図第5・7層)の堆積があり、浄化センター建設前の耕作土を確認した。その下層の遺物包含層であるオリーブ黄色粘質土(第9層)を除去すると、標高約25m付近で平安時代から鎌倉時代にかけての遺構面を検出した。遺構を確認した面で人力掘削による遺構検出作業を実施した。この遺構面から、さらに0.1～0.4m掘り下げたところで、下層の遺構面を確認した。上層(第12層上面)では平安・鎌倉時代、下層(第14層上面)では古墳時代以前縄文時代までの遺構を検出した。

平安時代から鎌倉時代にかけての遺構面を、第1遺構面として調査した。検出した遺構は、耕作溝や溝、柱穴、土坑、井戸などである。また、掘立柱建物跡2棟や欄列を復元することができ



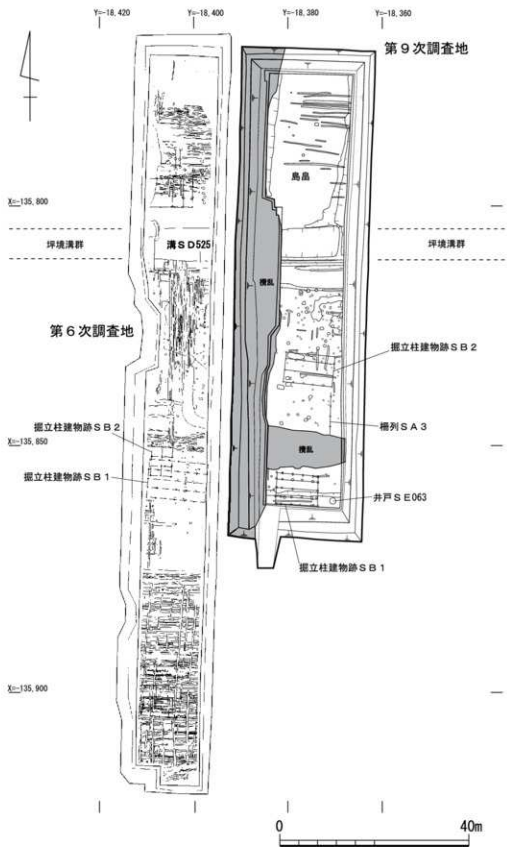
- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1. 砕石 | 8. 明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土 |
| 2. 現代造成土 | 9. オリーブ黄色(5Y6/3)粘質土 |
| 3. 明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土 | 10. オリーブ黄色(5Y6/3)粘性砂質土 |
| 4. 明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土 | 11. 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土 |
| 5. 浅灰色(2.5Y7/3)粘質土 | 12. 緑灰色(10G5/1)粘性砂質土 |
| 6. 明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土(砂を多く含む) | 13. にぶい黄色(2.5Y6/4)粘性砂質土 |
| 7. 浅灰色(2.5Y7/3)粘質土 | 14. 明黄褐色(2.5Y7/6)砂 |

第3図 調査地北壁土層断面図

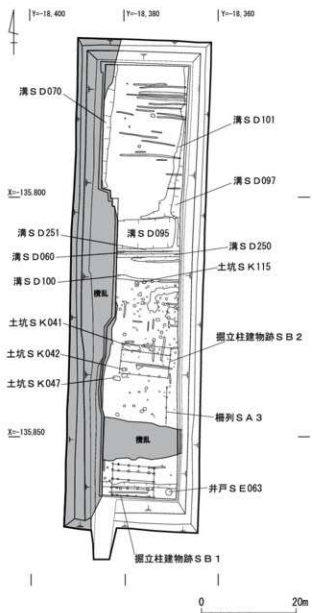
た。

第1遺構面の調査終了後、下層遺構の調査を実施した。縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代前期・中期の遺構を同一面で検出した。この遺構面を第2遺構面とし調査を実施した。調査地の北部では、第1遺構面から第2遺構面まで約0.4mの深さがあり、第2遺構面は南に向かって上がっており、南端部では0.1m程度であった。重機でこの土を掘削後、人力による遺構精査を行った。

縄文時代の遺構では、晩



第4図 第6・9次調査調査区 第1遺構面



第5図 第1遺構面遺構配置図

削平によって耕作面が消失している可能性が認められた。また、柱穴などの遺構も確認できないことから、この区画内は耕作地であった可能性が高い。坪境溝群 S D 095 より北側に関しては、周囲を溝状に掘ることで区画し、掘った土で周囲より高く盛り上げて島畠を造り、増水の対策を施し耕作地として利用していたと推測する。S D 070 の溝の底は確認できなかったが、溝 S D 097 については最も深い所で検出面から約 40cm あり、島畠の盛り土については削平を受けており不明であるが、耕作溝の残存する深さから推測すると、周囲の溝と耕作面では 50cm の高低差があったと思われる。溝 S D 070・097 からは、小片であるが 12～14 世紀の土器片が少量出土しているが、島畠を造った時期は不明である。溝 S D 101 は、最大幅で 1.9m、深さ 0.15m の浅い溝であり、溝 S D 097 や坪境溝群 S D 095 の上面で検出した東西方向の耕作溝より新しい時期の溝である。

坪境溝群 S D 095 (第 6 図) この溝群は、幅 0.5～2m を測る東西方向の溝が何度も掘り返さ

期の遺構と判断される焼土坑 1 基と土器を埋納した土坑の 2 基を検出した。弥生時代の遺構では、調査地北部で後期の遺物が出土した東西方向の大溝を検出した。古墳時代では、前期と判断される竪穴式住居跡 2 基や中期末の古墳 4 基を検出した。

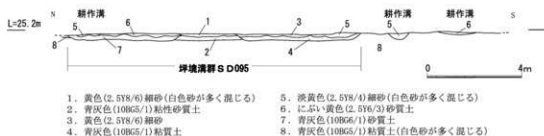
2. 検出遺構

(1) 第 1 遺構面

平安時代から鎌倉時代までの遺構を検出し、平安時代の掘立柱建物跡 2 棟や溝列、井戸、鎌倉時代以降の土坑や溝、条里制地割に由来する溝群や耕作溝などを検出した。

1) 中世の遺構

島畠 調査地北側では、標高 24.9～25.1m の高さで、西辺を南北方向の深さ 0.3m を測る溝 S D 070、東辺を南北方向で深さ 0.38m の溝 S D 097 で、南辺を東西方向の溝 S D 095 に囲まれた区画を確認した。区画内では耕作溝群のみを検出した。耕作溝のほとんどは東西方向の溝であり、幅約 15cm、深さも約 2～5cm と浅く、後世の削



第6図 埤境溝群 S D 095はか土層断面図

れた溝の集合体で、幅6.2mの範囲に集中している。これらの溝群は、第6次調査で確認した東西方向の埤境溝の東延長部にあたる。上面が削平されていることから、溝の新旧関係は不明である。これらの溝群は、相楽郡条里遺構の埤境の溝群であると考えられる。

土坑 S K 041 東西1.2m、南北0.8m、深さ0.15mを測る隅丸長方形を呈する土坑である。土坑内から土師器・瓦器の小片や長さ13.6cmの釘状の鉄製品1点が出土した。

土坑 S K 042(第7図) 東西0.83m、南北0.7m、深さ0.3mを測る。土坑内からは瓦器皿3枚、土師器皿3枚が2列に並べられた状態で出土した(第20図17～19)。土師器の皿は土坑内の北東側に東西方向に並べられ、その南側に瓦器の皿(同20～22)が並べられている。これら出土した遺物から、12世紀中頃の遺構と考えられる。この遺構の性格については不明である。土坑内には棺痕跡等は確認できなかったが、人を葬る墓や何らかの儀式が行われた土坑であった可能性が考えられる。

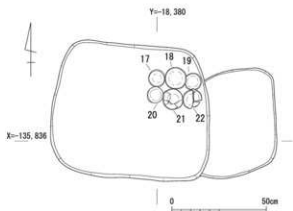
土坑 S K 047 東西3.6m、南北1.3m、深さ0.2mを測る隅丸長方形を呈する土坑である。土坑内から土師器や瓦器の小片が出土した。また、土坑の埋土には拳大の河原石が多く混入していた。

溝 S D 060 幅0.4m、深さ0.3mを測る東西方向の溝である。埋土からは土師器・瓦器片のほかに、外面に黒漆、内面に赤漆が塗られた漆器椀の破片が出土した。

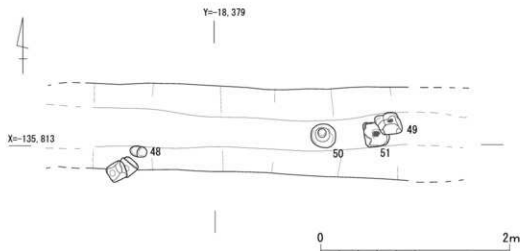
溝 S D 100 幅0.5m、深さ0.4mを測る東西方向の溝である。埋土から土師器・瓦器片などが出土した。

溝 S D 250 幅0.9m、深さ0.5mを測る東西方向の溝である。埋土から土師器・瓦器片などが出土した。

溝 S D 251(第8図) 幅0.5m、深さ0.7mを測る東西方向の溝である。溝の底部には拳大の河原石が多量に堆積し、西端部の上面や溝底では五輪塔の空輪、火輪、水輪などが出土した。この溝は、埤境溝群 S D 095の南に隣接し、他の耕作溝に比べると溝が深く、河原石や五輪塔、羽釜などの土器片が出土している。この溝は耕作溝ではなく、埤の北端部の区画もしくは排水の溝



第7図 土坑 S K 042遺物出土状況図



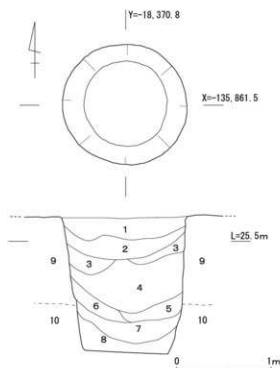
第8図 溝S D251五輪塔出土状況図

であったと考えられる。この溝の廃絶時に投棄されたものと考えられる。溝内には、五輪塔の石材と思われる凝灰岩の破片が多く含まれていた。第6次調査の溝S D525につながる可能性がある。

2) 平安時代の遺構

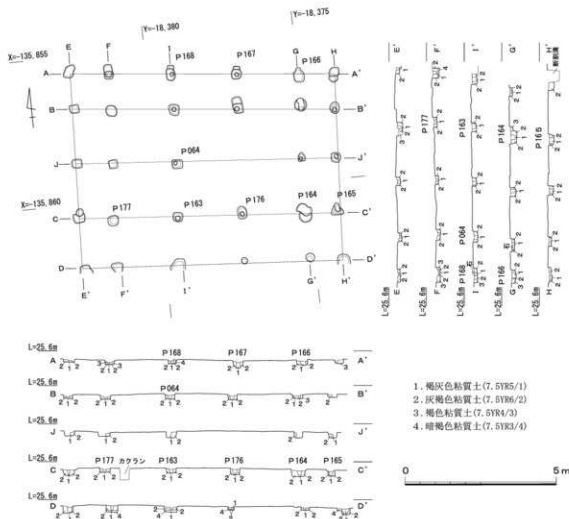
井戸S E063(第9図) 掘立柱建物跡S B1の東側で検出した直径1.3m、深さ1.45mの円形を呈する素掘りの井戸である。井戸枠や曲物等の痕跡は確認できなかった。井戸の底は粘土層(青灰色粘土)で終わっており、水が湧く状況ではなく、水溜りとして利用されていたと考えられる。第1層の明黄褐色粘質土や第2層のにぶい黄色粘土から、少量の瓦器片が出土したが、後世の耕作溝等の遺物が混入したと考えられる。井戸の時期は不明であるが、掘立柱建物跡に付随する井戸であった可能性も考えられる。

掘立柱建物跡S B1(第10図) トレンチ南端で検出し、東西5間(長さ8.8m)、南北4間(長さ6.9m)を測る。建物を構成する柱穴の掘形は、一辺が30~40cmの隅丸方形を呈し、深さは遺構検出面から25~30cm残っていた。建物は東西棟であり、3間×4間の身舎に南北の2面に1間の庇が付く



1. 明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土(粗砂混じり)
2. にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土(粗砂混じり)
3. 灰黄色(2.5Y6/2)粘質土(粗砂混じり)
4. 黄褐色(2.5Y5/4)粘質土(粗砂混じり)
5. 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(粗砂混じり)
6. 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
7. 灰色(5Y5/1)粘質土
8. 灰オリーブ色(5Y5/3)粘質土(粗砂混じり)
9. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
10. 青灰色(5B6/1)粘土

第9図 井戸S E063実測図



第10図 掘立柱建物跡SB1実測図

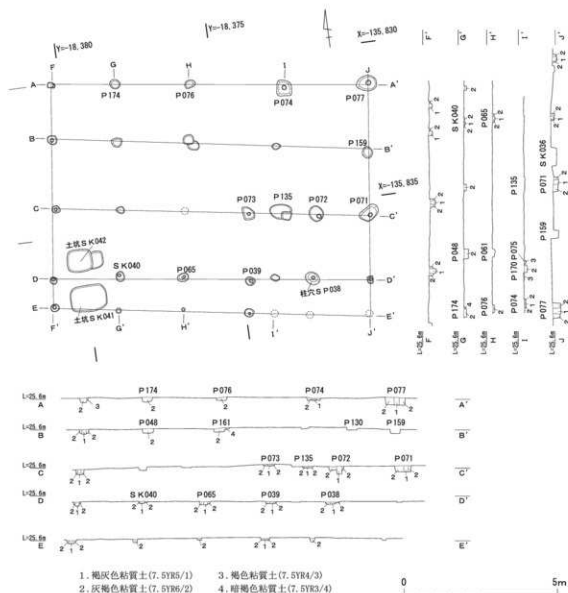
建物であるか、3間×2間の身舎に4面1間の庇が付く建物が想定される。この建物を構成する柱穴からは、建物の時期を示す遺物は出土しなかったが、第6次調査で検出した掘立柱建物跡SB1と主軸が同じであることなどから、後述のように、SB2とともに平安時代中期のものと同断する。

掘立柱建物跡SB2 (第11図) 東西5間(長さ13.1m)、南北3間(長さ7.5m)を測る東西棟である。この建物を構成する柱穴P038の柱掘形からは、ともに平安時代中期(10世紀中頃)の土師器皿と瓦器皿が出土した(第20図23・24)。今回検出した掘立柱建物跡2棟は、主軸が第6次調査で検出された平安時代中期の掘立柱建物跡と同じ主軸をもつことや、SB2の柱穴から出土した遺物から、平安時代中期に建てられたものと考えられる。

構列SA3 掘立柱建物跡SB2の南東側で、南北方向に柱穴が4基並び、掘立柱建物跡SB2の南東隅の柱に取り付くと考えられる。南側は攪乱によって消失しており、確認できたのは、長さ約6m分である。

(2)第2遺構面

縄文時代晩期の土坑や弥生時代の大溝、古墳時代前期の竪穴式住居跡2基、古墳時代中期末の



第11図 掘立柱建物跡S B 2実測図

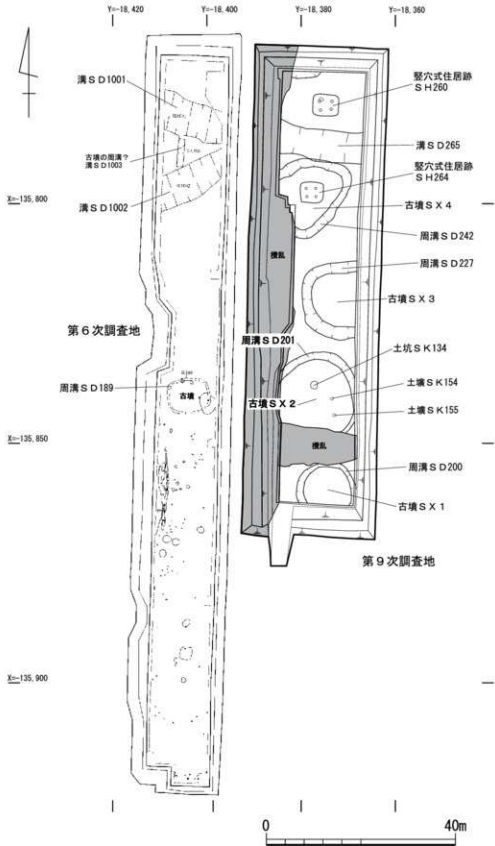
古墳4基などを検出した。なお、古墳の規模や周溝の規模については、後世に削平を受けているため詳細は不明であり、遺構検出時の数値を報告する。

1) 古墳時代の遺構

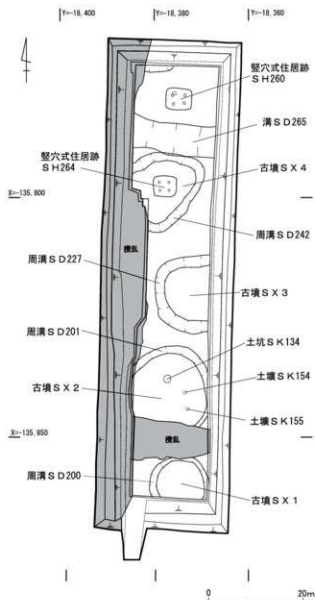
古墳S X 1 (第14図) トレンチの南端部で検出した直径約12mを測る円墳である。墳丘および埋葬施設は、後世に削平されて消失し、周溝のみが残っていた。

周溝S D 200 円形の周溝の南側部分については、平成22年度の調査範囲外に延びている。周溝は幅約1.5m、深さ0.28mを測る。東側の周溝内から、須恵器の高杯とその蓋・杯・甕などが出土した。西側の周溝内から、土師器の甕・壺などが出土した(第24図52～65)。遺物は完形に近いものが多く、埋納されていた可能性も考えられる。南側の第10次調査で、この周溝の南半を検出している。

古墳S X 2 (第14図) 直径約18mを測る円墳である。墳丘および埋葬施設は後世に削平され、



第12図 第6・9次調査調査区 第2遺構面



第13図 第2遺構面遺構配置図

東西約13.0mを測る。

周溝 S D242 周溝の幅約2.0m、深さ約0.15mを測る。ほかの古墳 S X 1～3 に比べると、周溝の深さは浅く、土器類の出土は少量であるが、円筒埴輪の破片が出土した。古墳 S X 1・2 の周溝内から出土した土器から、築造時期は古墳時代中期末(5世紀末～6世紀初頭)と考えられる。第6次調査で検出した2基の古墳とはほぼ同時期のものである。

竪穴式住居跡 S H260(第16図) 標高24.72mでトレンチの北側で検出した隅丸方形を呈する住居跡で東西約5.1m、南北約4.2mを測る。床面南西部から古墳時代前期の土師器甕の破片が出

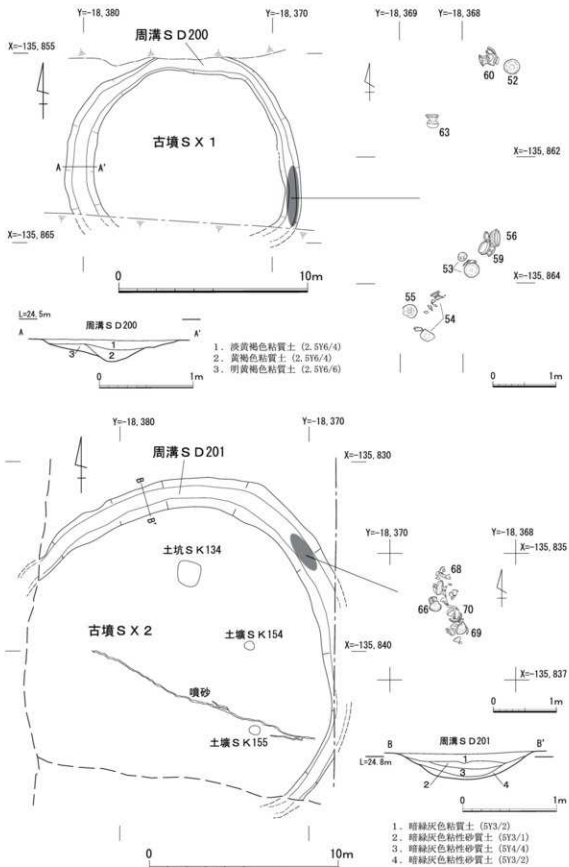
周溝のみが残っていた。

周溝 S D201 周溝の南側部分が、後世の攪乱によって消失している。周溝は幅約1.8m、深さ約0.25mを測る。周溝内から遺物が西側・北側、東側の3地点にまとまった形で出土した。遺物は古墳1と同じく完形に近いものが多く、埋納されていた可能性が考えられる。出土遺物には、須恵器の高杯・蓋・甕や土師器甕などがある(第25図66～82)。

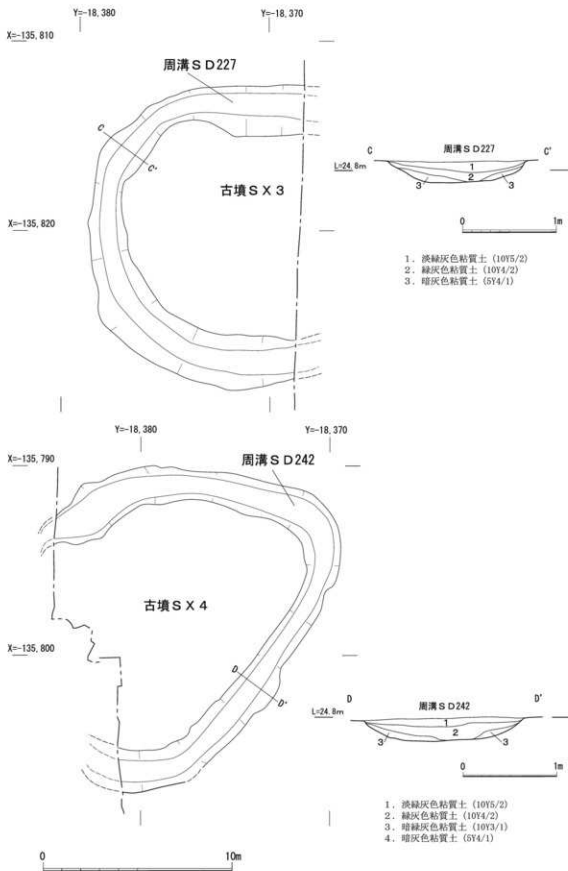
古墳 S X 3(第15図) トレンチの中央部で検出したが、東半部はトレンチ外となる。他の古墳と同じく、墳丘および埋葬施設は後世に削平され、周溝のみが残っていた。東半分は確認できなかったが、この古墳は、直径約13mを測る円墳に復元できる。

周溝 S D227 円形の周溝の東側部分が今回の調査範囲外に延びている。周溝の幅約2.6m、深さ約0.21mを測る。周溝内から須恵器や土師器の破片が少量出土し、小片であるが円筒埴輪の破片が出土した(第25図85～87)。

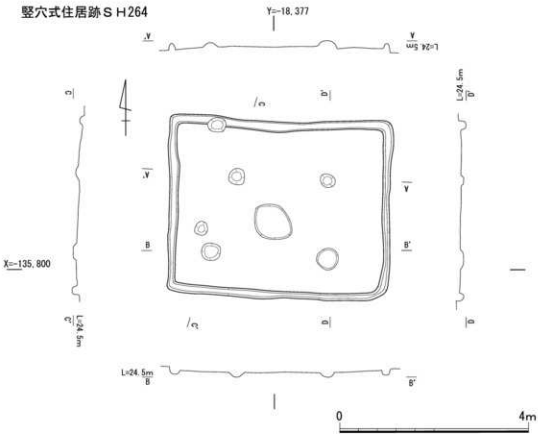
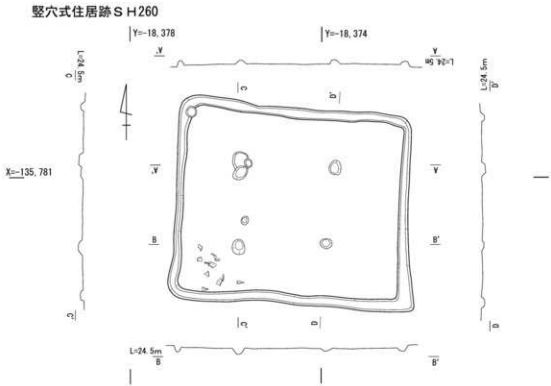
古墳 S X 4(第15図) 墳丘は後世に削平され、周溝のみが残っていた。ほかの古墳と比べると平面形は歪である。古墳の規模は、南北約16.5m、



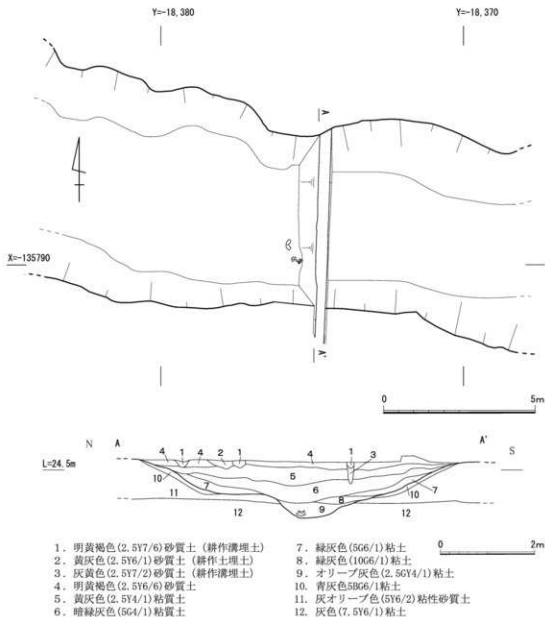
第14図 古墳 S X 1 周溝 S D 200・古墳 S X 2 周溝 S D 201実測図



第15図 古墳SX3・4実測図



第16図 竪穴式住居跡 S H260・264実測図



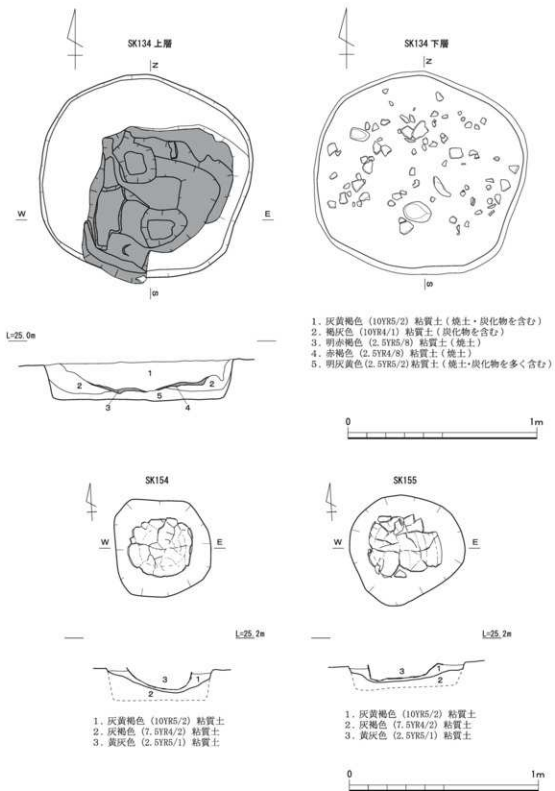
第17図 溝 S D265実測図

土した(第26図88・89)。

竪穴式住居跡 S H264(第16図) 古墳 S X 4の削られた墳丘の下層の標高24.68mで検出した。隅丸方形を呈する住居跡で、東西約5.1m、南北約4.2mを測る。遺物は出土しなかった。これら2基の竪穴式住居跡の時期については、竪穴式住居跡 S H260から出土した遺物や竪穴式住居跡 S H264が古墳 S X 4の墳丘が削平されている面で検出されたことから、古墳時代前期のものと考えられる。

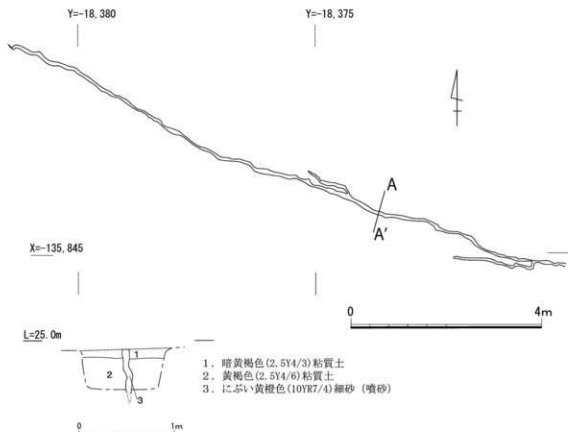
2) 弥生時代の遺構

溝 S D265 トレンチの北側で検出した幅約6m、深さ約1.5mを測る東西方向の溝である。溝の底は東側が深いことから、東にある木津川に流入していた可能性がある。溝の底部では、弥生時代後期の土器が出土した。第6次調査で検出されている弥生時代の溝 S D1001の東延長部と



第18図 土坑SK134、土坑154・155実測図

判断される。また、第6次調査で検出された溝SD1002の延長部については、本調査地内では確認できなかった。第6次調査では、弥生時代前期の溝も確認されているが、本調査では確認できず、第6～9層に遺物が混入するのみであった。おそらく、後期の溝の掘削により消失したものと



第19図 噴砂実測図

と考えられる。弥生時代前期の土器、縄文土器が埋土中から出土しているが、混入品と考える。

3) 縄文時代の遺構

土坑 S K 134(第18図) 南北1.1m、東西1.7m、深さ0.21mを測る円形の土坑である。土坑の上部には赤く焼けた土や炭が厚く堆積し、下部では焼けた縄文時代晩期の土器片や石が多数出土した。

土坑 S K 154(第18図) 土坑 S K 134の南側で、縄文時代晩期の甕が横に据えられた楕円形の土坑を検出した。東西0.5m、南北0.32m、深さ0.12mを測る。甕は口縁部を東にして横に据えられているが、横向きの甕の上部は、後世の削平によって欠損している。

土坑 S K 155(第18図) 土坑 S K 134や土坑 S K 154の南側で、縄文時代晩期の深鉢が横向きに据えられた土坑を検出した。東西0.6m、南北0.55m、深さ0.08mを測る楕円形を呈する。深鉢は口縁部を東にして横に据えられていたが、横向きの甕の上部は、後世の削平によって欠損している(第30図157)。

4) 時期不明の遺構(第19図)

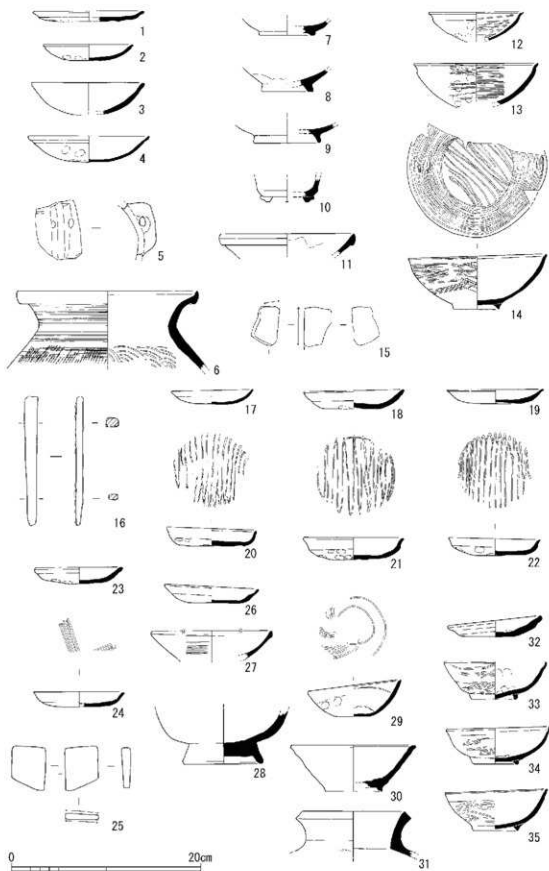
時期は不明であるが、第2遺構面で地震による噴砂痕跡を確認した。噴砂は、第1遺構面では、検出することができなかったが、幅が広いところで3cmと細く、東西方向に延びていた。検出した第2遺構面のベース面は粘土層であり、30cmほどの堆積があり、その下層の砂層から噴き上がったものと考えられる。

3. 出土遺物

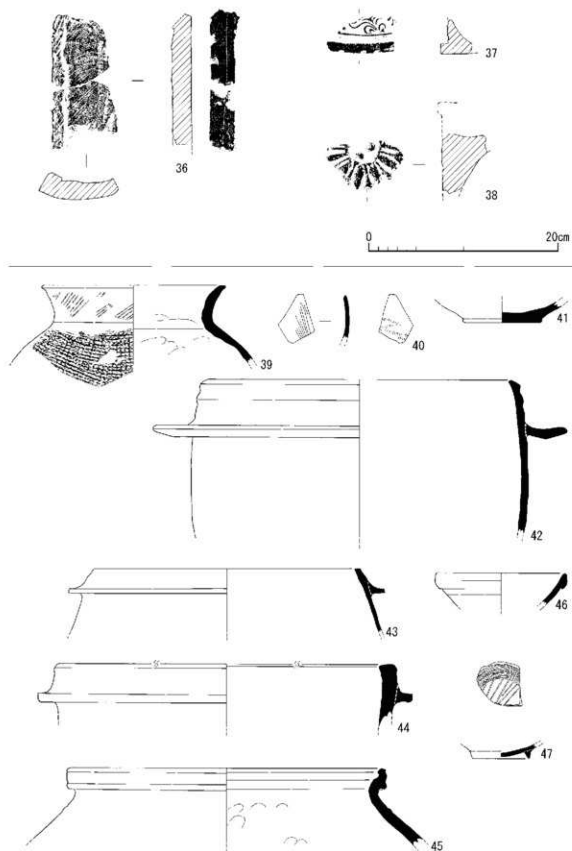
1～15は、第1遺構面上層の遺物包含層(オリブ黄色粘質土)および遺構検出中の精査作業中に出土した遺物である。1は土師器の皿である。口径は復元で11.6cmを測る。2は土師器の皿である。口径は復元で9.6cmを測る。底部に指押さえの痕跡がみられる。3は土師器の杯である。口径は復元で12.0cmを測る。4は土師器の杯である。口径は復元で15.2cm、器高は3.2cmを測る。外面底部に指押さえの痕跡が見られる。5は須恵器の甕の把手部分である。把手部分の中央に楕円形の穴が開けられている。6は須恵器の甕の口縁部である。口径は19.0cmを測る。7は施釉陶器の碗の底部である。高台は貼り付けて、底部径は6.3cmを測る。8は白磁の碗の底部である。底部径は12.1cmを測る。9は施釉陶器の碗の高台部分である。高台径は7.2cmを測る。10は施釉陶器の底部の破片である。器種は不明であるが、5mmの高さの円形の高台が付く。11は白磁の碗の口縁部である。口径は14.4cmを測る。12は瓦器の碗の破片である。口径は10.0cm、器高は3.0cmを測る。外面には指押さえ、内面には暗文が施されている。13は瓦器の碗の破片である。口径は13.0cm、器高は4.5cmを測る。外面には指押さえと暗文、内面には暗文が施されている。14は瓦器の碗である。口縁は14.8cm、高台は貼り付けて5.8cmを測る。15は石製の砥石である。砥ぎ面を1面確認している。

16～29は第1遺構面から検出した遺構から出土した遺物である。16は土坑S K041から出土した鉄製の釘状の製品である。残存する長さは13.6cmを測る。17～22は土坑S K042から出土した遺物で、すべて完形品である。17は土師器の皿で口径は8.7cm、器高は1.7cmを測る。18は土師器の皿で口径は10.7cm、器高は2.1cmを測る。19は土師器の皿である。口径は10.3cm、器高は1.5cmを測る。20は瓦器の皿である。内面には暗文が施されている。21は瓦器の皿で、口径は10.4cm、器高は2.35cmを測る。内面に暗文が施されている。22は瓦器の皿である。口径は9.6cm、器高は1.9cmを測る。内面には暗文が施されている。これらS K042から出土した遺物は、12世紀中頃に属する土器と判断される。23・24は掘立柱建物跡S B 2の柱穴S P038から出土した遺物である。23は土師器の皿で、口径は9.3cm、器高は1.8cmを測る。24は瓦器の皿で、内面には「十」字状の暗文がみられる。平安時代中期に属する遺物と判断する。25は溝S D100から出土した石製の砥石で、砥ぎ面は2面確認している。26・27は土坑S K047から出土した。26は土師器の皿の口縁部である。口縁端部に焼けた痕跡と炭が付着していることから、灯明皿として使用されていたことがわかる。27は白磁の碗の口縁部である。口径は12.8cmを測る。28は溝S D060から出土した漆器の碗の底部である。外面には黒漆が塗られ、内面には赤漆が塗られている。高台径は8.8cmを測る。29は土坑S K115から出土した瓦器の碗である。歪んではいるが完形で出土した。口径は最大で9.8cm、器高は3.9cmを測る。内外面に暗文がみられる。

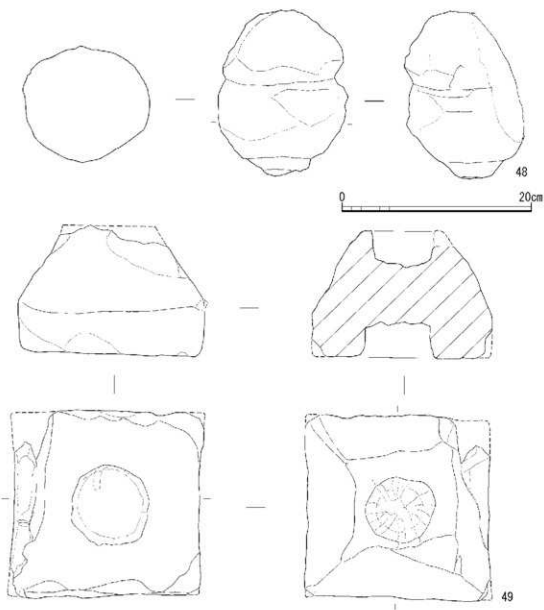
30～38は、第1遺構面から第2遺構面までの掘削の際に出土した遺物である。30は須恵器の鉢である。口径は13.0cm、器高は4.9cmを測る。高台は削り出し高台である。31は土師器の短頸壺の口縁部である。口径は10.8cmを測る。32は土師器の皿で、口径は9.8cm、器高は1.7cmを測る。33～35は黒色土器である。3点とも瓦器よりも器壁が厚く、内外面とも黒色である。一部欠損



第20図 包含層、第1・2遺構面出土遺物実測図



第21図 第1・2遺構面、溝S D210・251出土遺物実測図

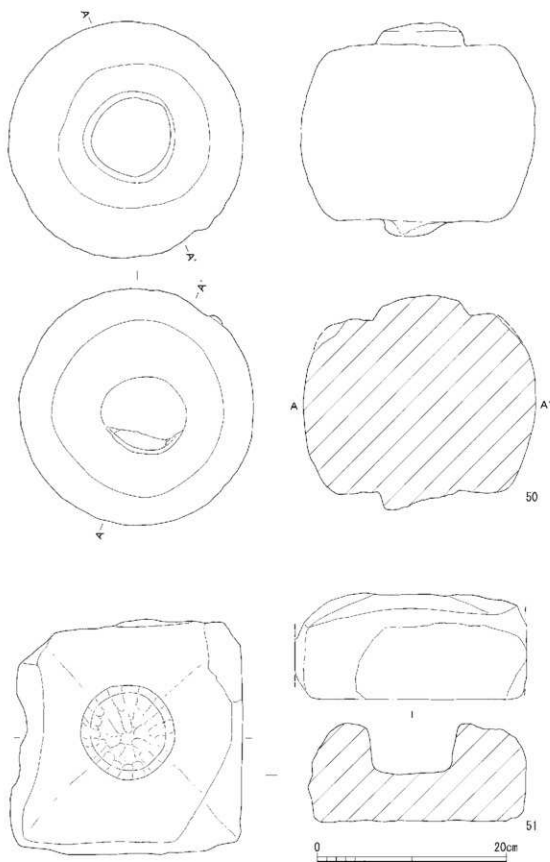


第22図 五輪塔実測図(1)

しているが完形に近い状態である。33は口径11.0cm、器高5.0cmを測る。34は口径13.0cm、器高4.0cmを測る。35は口径10.8cm、器高は4.5cmを測る。

36～38は瓦である。36は平瓦で表面には布目がみられる。平瓦は桶巻き作りで、長さ13.7cm、幅2.6cmの切断面が残る。37は軒平瓦である。瓦当部の摩滅は著しいが、白鳳期の寺院である木津川市高麗寺と同じ型式と判断できる。38は軒丸瓦である。瓦当面に唐草文がみられるが、型式や時期は不明である。3点とも磨滅が著しい。

39～48は第2遺構面で検出した遺構から出土した遺物である。39・40・42は溝S D210から出土した遺物である。39は須恵器の甕の口縁部の破片である。外面の一部には自然釉がみられる。40は深い緑色をした同安窯系の青磁碗の口縁部である。小片のため判別できないが、内外面ともに文様が施されている。12～13世紀に属する。41は溝S D250から出土した須恵器の底部である。

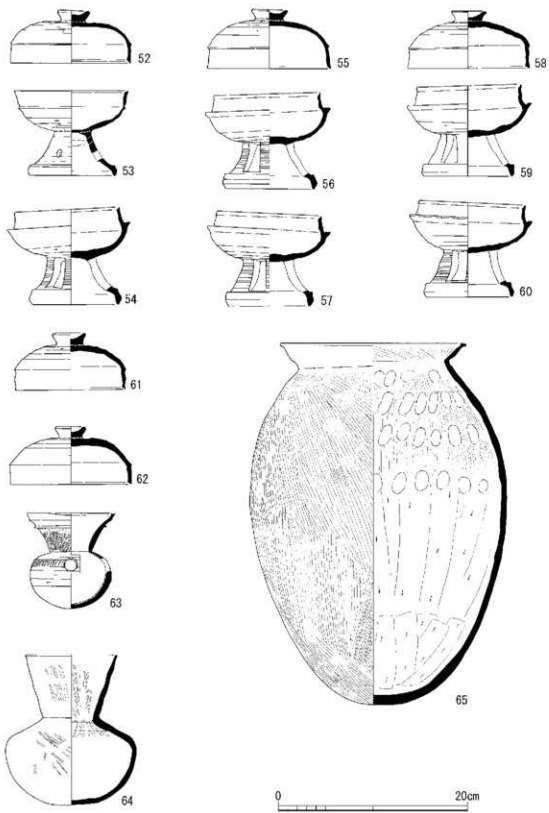


第23図 五輪塔実測図(2)

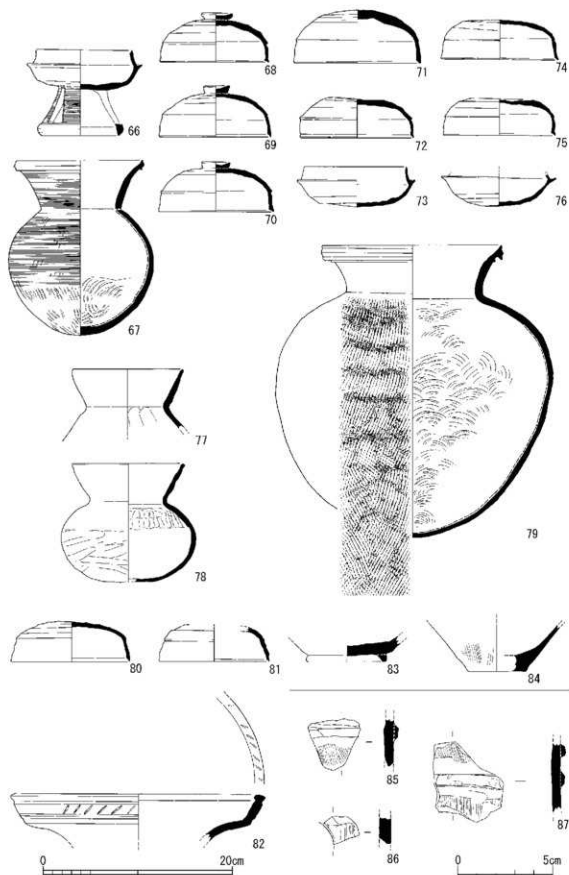
壺と思われる底部の径は8.4cmを測る。42は瓦質の羽釜の破片である。口径は復元で33.6cmである。外面の磨減が激しい。43～48は溝S D251から出土した遺物である。43は土師器の羽釜である。口径は復元で28.2cmである。44は瓦質の羽釜である。45は須恵質の甕の口縁部で、表面は暗赤灰色である。口径は33.0cmを測る。46は白磁の碗の口縁部の破片である。口径は14.2cmを測る。47は瓦器の碗である。内面には円形と直線の暗文がみられる。高台径は6.2cmである。48～51は溝S D251から出土した五輪塔である。ともに石材は凝灰岩であり、磨減が激しい。48は空風輪部分である。残存する高さは17.5cmで、最大径は13.5cmを測る。宝珠形を呈する空輪と半月形を呈する風輪が一体となっている。49は屋根形を呈する火輪部分である。底部の一辺は20.0cm、高さは13.2cmである。上面・下面ともに接合部の凹みがある。50は円形を呈する水輪部分で、高さ22.4cm、最大径24.7cmを測る。出土した中では比較的残りがよい。51は方形を呈する地輪部分である。底部は24.7cm、高さ11.0cmを測り、中央に直径9.9cm、深さ4.7cmの接合部の凹みがある。この他に溝S D251からは部位不明の五輪塔と思われる凝灰岩の石材片が数点出土している。それぞれの部位が小型で、古い要素を持つことから、平安時代後期(12世紀後半)のものだと判断する。

52～65は古墳S X 1の周溝S D200内から出土した遺物である。52～62は周溝の南東部から出土した。52は須恵器の杯蓋で蓋頂部にはつまみが付く。口径は12.6cm、器高は5.6cmを測る。53は須恵器の高杯で、有蓋のものである。脚部には円形の透かしがある。口径は12.0cm、器高9.0cmを測る。54は高杯で、口径は11.5cm、器高9.0cmを測る。55は高杯の蓋で、口径は13.0cm、器高6.3cmを測る。56は高杯で、口径は11.5cm、器高10.3cmを測る。57は高杯で、口径は10.9cm、器高10.15cmを測る。58は高杯の蓋で、口径は11.8cm、器高6.1cmを測る。59は高杯で、口径は11.0cm、器高9.8cmを測る。60は高杯である。口径は11.2cm、器高10.3cmを測る。61は高杯の蓋で、口径は11.5cm、器高6.0cmを測る。62は高杯の蓋で、口径は12.8cm、器高6.1cmを測る。63は周溝の東部から出土した甕で、口径は9.8cm、器高10.2cmを測る。頸部外面には波状文、体部には円形の透かしがあり、その横には沈線や連状文が施されている。64は周溝内の西部から出土した土師器の長頸壺で、口径は10.4cm、器高16.0cmを測る。内外面ともにハケメの調整が残る。65は周溝内の西部から出土した土師器の長胴壺で、口径は19.8cm、器高38.2cmを測る。口縁部はヨコナデ、底部内面にはヘラケズリ、上部にはハケメ、指押えがある。外面全体にはハケメの調整がみられる。

66～82は古墳S X 2の周溝S D201内から出土した遺物である。66は周溝内の北部で出土した須恵器の高杯である。口径は10.0cm、器高9.1cmを測る。67は周溝内の北東部から出土した須恵器の壺である。口径は13.7cm、器高は13.6cmを測る。外面にはカキメ、内面底部には同心円タキがみられる。68は周溝内北西部から出土した高杯の蓋である。口径は11.5cm、器高は5.8cmを測る。69は周溝内北西部から出土した高杯の蓋である。口径は11.7cm、器高は5.45cmを測る。70は周溝内北西部から出土した高杯の蓋である。口径は12.3cm、器高は5.3cmを測る。71は周溝内北西部から出土した須恵器の蓋である。口径は13.2cm、器高は5.65cmを測る。72～75・77・



第24図 古墳S X 1 周溝S D200出土遺物実測図



第25図 古墳SX2周溝SD201・SX4周溝SD242出土遺物実測図

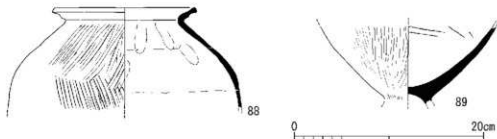
78・80・82は周溝内の北東部から出土した。72は須恵器の蓋である。口径は12.0cm、器高は5.3cmを測る。73は須恵器の杯である。口径は10.6cm、器高は4.3cmを測る。74は須恵器の蓋である。口径は11.5cm、器高は4.2cmを測る。75は須恵器の蓋である。口径は11.8cm、器高は3.95cmを測る。76は須恵器の杯である。口径は11.8cm、器高は3.95cmを測る。周溝内の北西部から出土した。77は土師器の壺の口縁部の破片である。口径は11.5cmである。78は土師器の短頸壺である。口径は11.6cmで、器高は12.6cmを測る。79は須恵器の甕である。ほぼ完形に復元できる。口径は18.8cm、器高は31.1cmを測る。外面体部には平行タタキがみられ、内面には同心円のタタキがみられる。周溝内の北部で出土した。80は須恵器の蓋である。口径は12.5cmで、器高は4.3cmを測る。周溝内の北部から出土した。81は須恵器の蓋である。口径は11.8cmで、器高は3.7cmを測る。82は土師器の壺の口縁部である。口径は26.8cmである。口縁端部および口縁外部に連続した沈線の装飾がみられる。古墳S X 1・2の周溝から出土した須恵器は完形品もしくは完形に復元できる個体がほとんどである。これらの土器から、これらの古墳の築造時期は古墳時代中期末(5世紀末～6世紀初頭)と推定される。

83・84は古墳S X 3の周溝S D 227内から出土した土器である。83は須恵器の壺の高台部分である。高台径は8.4cmを測る。84は土師器の壺の底部の破片である。

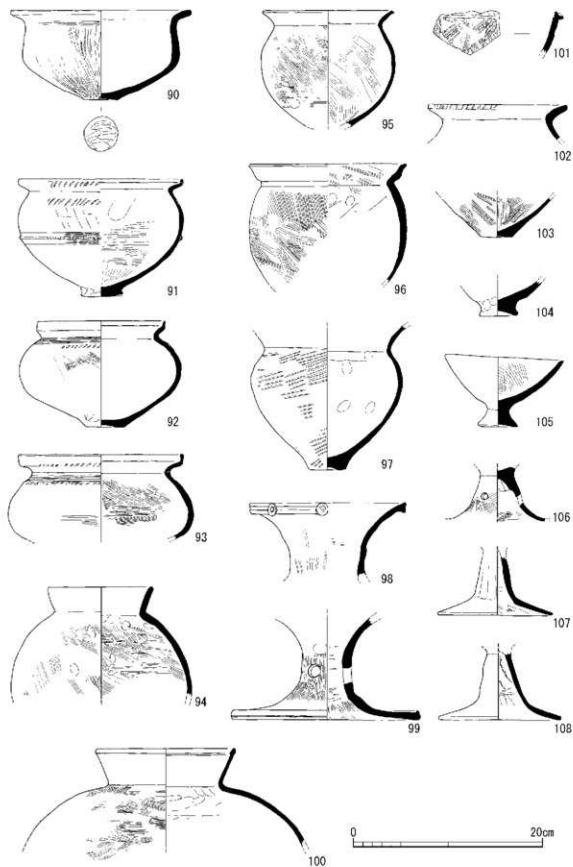
85～87は円筒埴輪の破片である。85は古墳S X 4の周溝S D 242の精査中に出土した。タガ状突帯部が残り、ハケメ調整がみられる。86は古墳S X 3の周溝S D 227内から出土した。小片であるが円形の透かしの一部がみられる。87は第1遺構面から第2遺構面の掘削時に出土した。タガ状突帯部分を挟んでハケメ調整が残る。

88・89は竪穴式住居跡S H 260の床面から出土した古墳時代前期の土師器の甕の破片である。88は甕の口縁部から体部にかけての破片である。口径は、14.8cmを測る。外面には粗いハケメがみられ、口縁部にはヨコナデがみられる。89は甕の底部の破片である。底部先端部は欠損している。外面は粗いハケメがみられる。88と89は同一個体と思われるが、接点はみられない。

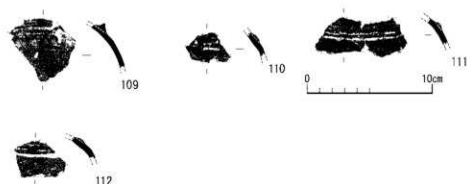
90～112は弥生時代の溝S D 265から出土した遺物である。弥生時代後期に属する。90は溝の底部から出土した鉢である。口径は19.0cm、器高は9.5cmを測る。外面には縦方向のヘラミガキがみられる。90は溝の底部から出土した鉢である。口径は17.2cm、器高は12.5cmを測る。体部外面の中央に貼り付け突帯があり、刻目文様がある。口縁部外周にも刻目文様がみられる。92は鉢である。口径は13.4cm、器高は10.3cmを測る。外面の頸部には列点文がみられる。93は鉢で



第26図 竪穴式住居跡S H 260出土遺物実測図



第27図 溝S D265出土遺物実測図(1)



第28図 溝 S D 265出土遺物実測図(2)

ある。口径は17.4cmを測り、底部は欠損している。外面の頸部には貝殻状の工具による刺突文様がみられる。94は甕の口縁から頸部にかけての破片である。口径は11.4cmである。内外面ともにハケメがみられる。95は甕である。底部が欠損している。口径は13.5cmを測る。体部の内外面にはハケメがみられる。96は甕の口縁部から体部の破片である。口径は16.8cmを測る。97は甕で、口縁端部が欠損しており、頸部から底部にかけて残存する。残存する器高は15.3cmである。外面には横方向のタタキがみられる。98は壺の口縁部の破片である。頸部には縦方向のミガキがみられる。99は器台の脚部と思われる。脚部の口径は20.0cmを測る。脚部には円形の透かしがある。100は甕の口縁部である。口径は14.7cmを測る。外面にはハケメがみられる。101の器種は不明であるが、口縁端部の破片である。外面にはヘラなどによる格子状の刻み文様がみられる。102は甕の口縁部の破片である。口径は14.6cmである。口縁端部に刻目文様がみられる。103は甕の底部片である。底部径は4.0cmである。内外面ともにハケメがみられる。104は鉢の底部の破片と思われる。底部には指押さえの痕跡がある。外面には磨滅しているがミガキがみられる。105は鉢で、口径は12.5cm、器高は7.6cmを測る。106は高杯の脚部で杯部が欠損している。脚部外面には縦方向のハケメがあり、円形の透かしがある。107は高杯の脚部であり、杯部が欠損している。脚部径は12.0cmを測る。脚部外面には縦方向の面取りがある。108は高杯の脚部で、杯部が欠損している。脚部径は12.9cmを測る。脚部外面には縦方向の面取りがある。

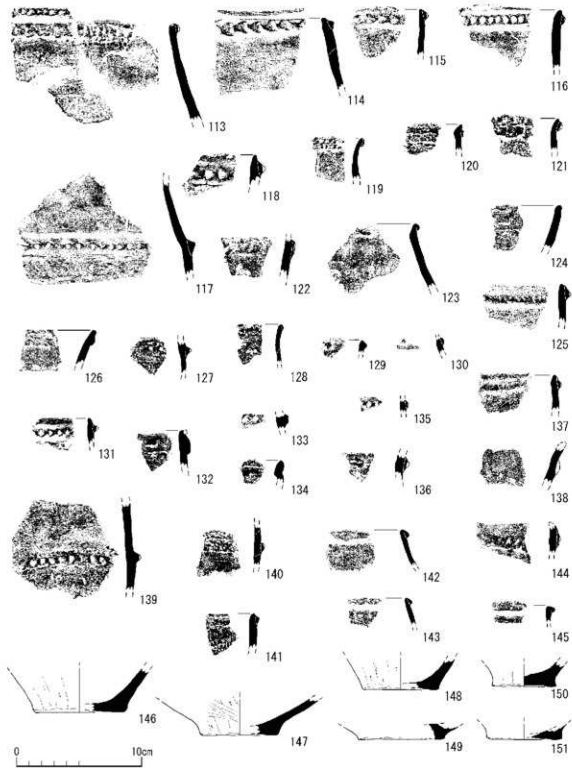
109～112は溝 S D 265内から出土した弥生時代前期中葉～後葉以降に属する土器片で、混入した遺物と考える。小片のため器種は不明であるが、頸部に突帯を持つ。

(村田和弘)

縄文土器

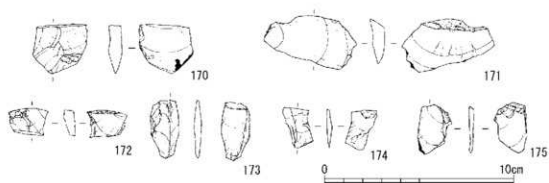
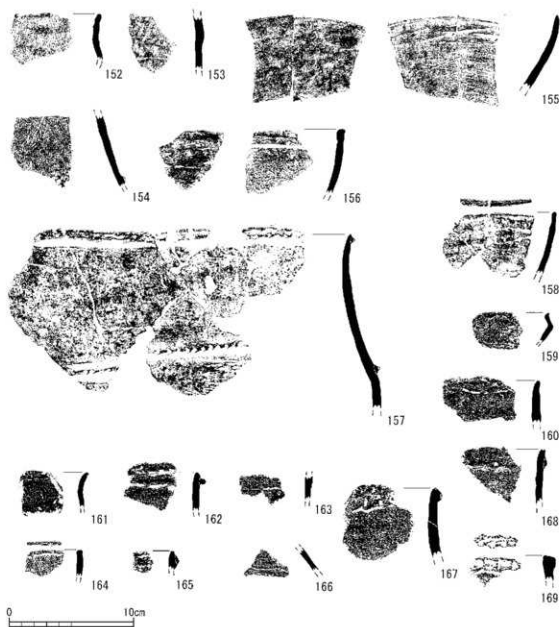
土坑 S K 134(第29図・第30図152～156) 113は口縁端はわずかな接合面を介し2つの破片で構成されているが、突帯のキザミ目の加工が若干異なるため別個体である可能性もある。口唇端部にも刻み目が施される。調整は外面が板状工具による縦方向のナデ、内面は横方向のナデである。胎土には直径3mm以下の石英・長石・雲母・チャートが含まれる。114は深鉢口縁部である。調整は内外面板状工具による横方向のナデである。胎土には直径4mm以下の石英・長石・雲母が含まれる。115は深鉢口縁部である。調整は内外面不明である。胎土には直径4mm以下の石英・

長石が含まれる。116は深鉢口縁部である。調整は内外面ナデ調整である。胎土には直径3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母が含まれる。117が深鉢胴部である。頸部外面は板状工具による横方向のナデ、胴部はケズリ、内面はナデである。胎土には直径3mm以下の石英・長石が含まれ、色調等は角閃石を含む土器と類似している。118は深鉢口縁部である。調整は外面不明、内面ナデである。胎土には直径4mm以下の石英・長石が含まれる。119は深鉢口縁部である。調整は内外面ナデである。胎土には直径4mm以下の石英・チャートが含まれる。120は深鉢口縁部である。調整は内外面ナデである。胎土には直径4mm以下の石英・長石・チャートが含まれる。121は深鉢口縁部である。調整は外面が板状工具による縦方向のナデ、内面は横方向のナデである。胎土には直径3mm以下の石英・チャート・赤色斑粒が含まれる。122は深鉢胴部で、調整は内外面ナデである。胎土には直径4mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒が含まれる。123は深鉢口縁部で、調整は外面が板状工具による縦方向のナデの後、部分的に横方向のナデが施され、内面はナデである。胎土には直径5mm以下の石英・長石が含まれる。124は浅鉢口縁部で、調整は外面ケズリ、内面ミガキである。胎土には直径3mm以下の石英・長石が含まれる。125は深鉢口縁部で、内外面の調整は不明である。137と同一個体の可能性が指摘できる。直径5mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。126は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径3mm以下の石英・長石を含む。127は深鉢胴部で、外面はナデ調整、内面は不明である。直径4mm以下の石英・長石を含む。128は鉢口縁部で、調整は内外面ナデである。直径4mm以下の石英・長石を含む。129は深鉢口縁部で、内外面ともにナデ調整である。直径3mm以下の石英・長石を含む。130は深鉢口縁部で、内外面ともにナデ調整である。直径3mm以下の石英・長石を含む。131は深鉢口縁部で、内外面ともにナデ調整である。直径4mm以下の石英・長石を含む。132は深鉢口縁部で、内外面ともにナデ調整である。直径3mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む。133は胴部突帯部分で、調整は内外面不明である。直径3mm以下の石英・長石を含む。134は浅鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径2mm以下の石英・長石を含む。135は胴部突帯部分で、調整は内外面不明である。直径3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。136は胴部突帯部分で、調整は内外面ナデである。径3mm以下の石英・長石・チャートを含む。137は深鉢口縁部で、内外面の調整は不明である。直径6mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。138は深鉢胴部で、突帯は刺雑している。調整は頸部外面がナデ、胴部外面がケズリ、内面はナデである。直径3mm以下の石英・長石・チャートを含む。139は深鉢胴部で、調整は頸部外面がナデ、胴部外面がケズリ、内面はナデである。直径4mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。140は深鉢胴部で、調整は不明である。直径4mm以下の石英・長石・チャートを含む。141は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径5mm以下の石英・長石・赤色斑粒を含む。142は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径3mm以下の石英・長石を含む。143と同一個体の可能性がある。143は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径3mm以下の石英・長石を含む。144は深鉢胴部で、内外面の調整は不明である。直径5mm以下の石英・長石・角閃石が含まれる。145は深鉢口縁部で、内外面の調整はナデである。直径



第29図 縄文土器実測図

4 mm以下の石英・長石を含む。146は深鉢底部で、調整は外面が板状工具による強いハケあるいはケズリ、底部外面も同じで、内面はナデである。直径5 mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む。147は浅鉢底部で調整は内外面ミガキである。直径4 mm以下の石英・長石・チャートを含む。148は深鉢底部で、調整は外面ケズリ、底部外面が不明、内面はナデである。



第30図 縄文土器・石器実測図

直径5mm以下の石英・長石・赤色斑粒を含む。146と同一個体の可能性がある。149は浅鉢底部の可能性のある個体で、調整は不明である。直径3mm以下の石英・長石を含む。150は底部片で、調整は不明である。直径3mm以下の石英・長石・雲母を含む。151は底部片で、調整は不明である。直径7mm以下の石英・長石・チャートを含む。152は鉢口縁部で、内外面の調整は表面の剝離のため不明である。胎土には直径3mmの石英・長石・赤色斑粒を含む。153は深鉢胴部片で、調整は不明である。直径5mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。154は深鉢頸部で、調整は外面が板ナデ、内面は不明である。直径5mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。155は浅鉢口縁部で、調整は外面板ナデまたはミガキ、内面は板ナデである。直径2mm以下の石英・長石を含む。156は浅鉢口縁部で、調整は内外面ともに板状工具によるケズリである。直径3mm以下の石英・長石を含む。

土壙SK155(第30図157) 157は土器棺に用いられていた深鉢である。胴部片も多量に残されていたが、接点がなかったため固化できなかった。調整は頸部外面が板状工具による縦方向のナデ後横ナデ、体部外面がケズリ、内面はナデである。直径4mm以下の石英・長石・チャートを含んでいる。

溝SD265(第30図158～163) 弥生時代の溝に混入して出土した縄文土器である。158は浅鉢口縁部で、調整は外面ケズリ、内面は板状工具によるナデである。直径4mm以下の石英・長石・角閃石を含む。159は浅鉢口縁部で、調整は内外面不明で非常に摩滅している。他の突帯文期の縄文土器に比べ古い時期に位置づけられる。直径2mm以下の石英・長石・角閃石を含む。160は深鉢口縁部である。口唇部外面には突帯の剝がれた痕跡が残されている。調整は不明で、直径3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。161は無文の鉢口縁部である。調整は内外面ナデ調整で、直径3mm以下の石英・長石・雲母を含む。162は深鉢口縁部で調整は内外面ナデである。直径3mm以下の石英・長石・雲母を含む。163は土器体部片で沈線で格子目状の模様がかれる。直径2mm以下の石英・長石を含む。

石器(第30図170～175) 170はサヌカイト製の剥片で、打面部側は折れ欠損している。折れ面の風化が他の剝離面と同じである。171はサヌカイト製の剥片で、背面には打面が残るポジティブな剝離面がある。母岩分割をした剥片を素材とした石核から剝離された剥片である。打面は自然面打面である。172は自然面打面を持つサヌカイト剥片で末端部は折れているが、風化面はすべて同じである。173は縦に長いサヌカイト製の剥片である。背腹両面の起伏が少なく、剥片が薄いことから両極剝離の可能性が指摘できる。174はサヌカイト製の剥片で、打面部側は折れ欠損している。折れ面の風化が他の剝離面と同じである。175はサヌカイト製剥片で、背腹の打点場はほぼ同じ位置にあったと考えられ両極打法によるものと想定できる。(中川和哉)

4. 小結

第1遺構面では、平安～鎌倉時代の遺構として、条里制地割に由来する坪境溝群を検出した。坪境溝群は、上部が削平されているため新旧関係は不明であるが、複数の溝が重なっている状態を検出しており、幾度かの掘り直しが行われたことを示している。溝群の南側には、耕作溝と

は深さが異なる東西方向の溝SD251があり、この時期の排水溝であったと考えられる。

また、平安時代中期の掘立柱建物跡2棟は、西に隣接する第6次調査の掘立柱建物跡と同じ主軸方向をもつ。同時期に同じ方位をもつ建物が隣接して建てられており、この平安時代の集落がさらに東に広がることを示唆する。

第2遺構面では、古墳時代中期末の古墳を新たに4基検出した。これまでの調査でみつかった古墳を合わせると6基になり、木津川の自然堤防上に多くの古墳が築かれていたことがわかった。

これまでの調査成果において、古墳時代中期の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡が遺跡の南側で検出されていた。また、今回、遺跡の北東側で同時期と判断される古墳時代中期末の小規模な古墳が6基確認できたことから、遺跡の北東部に古墳群が存在することが想定できる。

弥生時代については、調査地の北部で南北方向の溝SD265を検出し、この溝が前期から後期に掘り直して利用されていることが出土遺物からみてとれる。この溝はさらに東へ延びることも確認した。

(村田和弘)

(2)第10次調査(平成23年度)

1. 調査の概要

平成23年度の発掘調査は、平成22年度第9次調査区の南延長部に設定した調査区で実施した。西側は平成14年度第6次調査区と隣接し、南側では平成12年度第4次調査9トレンチと部分的に重複する。遺構面までの深さが約3mと深いため、掘削には安全な勾配を設け、中間に平坦面を設けて2段掘りを実施して安全に努めた。

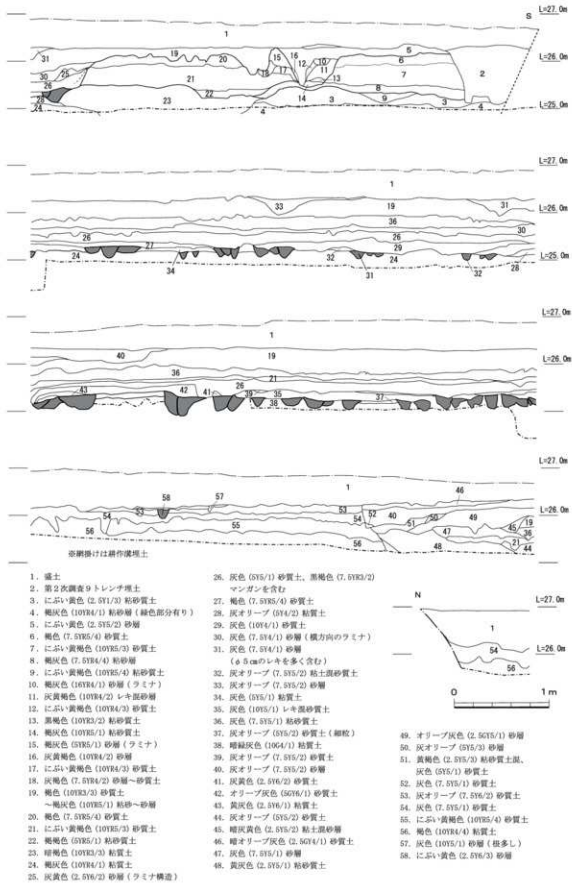
出土遺物は、弥生時代後期、平安時代前・中期の遺物をわずかに含むが、12世紀末～14世紀、古墳時代中期末、縄文時代晩期の3時期のものが主体である。時期や性格が明確な遺構は、12世紀末～14世紀のものと古墳時代中期末のものに限られる。

2. 層位と層序

発掘調査地の標高は約28mである。現在の地表面は約1.7mの客土からなる整地層であり、この整地層は施設建設に伴うものである。整地層下面では、旧地表と考えられる未分解の葦類を含む草木類が確認できた。旧地表面の標高は約26.3mである。

第31図は調査区東壁の断面実測図である。2段掘りのうち上段の1段目の土層断面は盛り土のみで構成されるため割愛し、1段目より下層の土層のみを提示している。また、調査区東断面の水平方向の長さが長いので、水平方向に対し鉛直方向が1.5倍になるよう縮尺を変更し、地層・地形の特徴が見やすくなるように替えている。

土層の堆積状況について断面図の南側から説明したい。第1層は盛り土でブロック状の粘土やコンクリート片などを含んでいる。第2層は、第4次調査の9トレンチを埋め戻した埋土である。第6・7層は島島造成のために盛り上げられた土層で、砂の含有量が多く、マンガンと考えられ



第31図 第10次東壁土層断面図

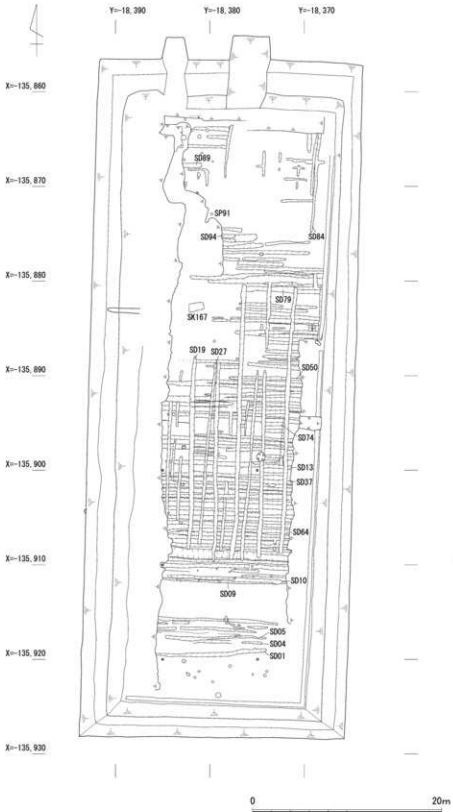
る褐色の斑粒が多く認められる。これらの層には、細片の土器が集中することなく散発的にどの高さからも出土することから、島畠を造る際に他の時期の包含層や遺構面を破壊して盛り土したものと考えられる。島畠(第6・7層)の北側には、溝状の落ち込みがある。洪水による砂層である第5層や南側の島畠から崩落して堆積したと考えられる第10～14層で埋まっている。今回の調査で検出した中世の埤境溝(第9層)と溝心々間の距離で2m離れた位置で掘削されていることがわかる。第15～18層はラミナ状の構造をもつ砂層や砂礫層で、第19層の落ち込み内の堆積とあわせて考えると、洪水で埋まる度に何度も掘り返されていることが窺える。第20・21層は島畠造成の盛り土と考えられる。その北側では第19層の洪水性の堆積層があり、島畠部分に近い南側では細粒であるが、島畠から離れた北側に行くに従い粗粒になっていく。その下の第40層は横方向のラミナ構造をもつ砂層で、流れの中で堆積したことを示している。中世の溝群を検出した層は第24・53層の上面で、これらの層は、第40層に比べて細粒の堆積物であることから、一つの画期が見出せる。第19層より下で中世溝の検出面までの堆積層は、調査区の北端から約12.5mの地点で島畠の造成土と考えられる第57・58層へと変わる。第26・30・36層は島畠の盛り土と盛り土の間を埋めるように堆積しており、この東壁断面の南から13m、北から12.5mの間の中世の耕作溝群は良好に残存していた。調査区南側では、耕作溝群より古い埤境溝の埋土にあたる第9層の掘削面が耕作溝群掘り込み面と約40cmの比高があり、中世段階には島畠の下層においても地形が高いことがわかる。また、第9次調査では、北側の島畠部分(第20～21層)も耕作溝群より古い遺構が高い位置で検出されている。こうした島畠の下層でも耕作溝群が検出されているが、いずれも検出面からの深さが浅いことや、検出した数が少ないことから、後世に削られたものと考えられる。これらのことから、耕作溝群が作られた範囲は、溝が掘削された時点から低い位置にあるものと推定される。それゆえ、古い平安時代以前の遺構は存在していないものと考えられる。

遺構検出面は二面あり、第1遺構面では主として中世耕作溝群を検出した。第2遺構面では、中世・古墳時代の遺構を検出した。南側の第1遺構面では、北側の第2遺構面と同じ時期の遺構があり、南側の第2遺構面では風倒木痕しか検出できなかった。縄文時代の遺物などが遺構検出面で散見されたことから、下層に縄文時代の遺構面が存在することが想定された。そのため、調査区の南部において、第2遺構面より下の土層確認用のサブトレンチを入れて土層の観察をしたところ、炭化物が凝集する土層が確認できたため、部分的に面的に拡げて調査を実施した。縄文時代の調査時の地層については縄文時代の遺構の部分で説明したい。

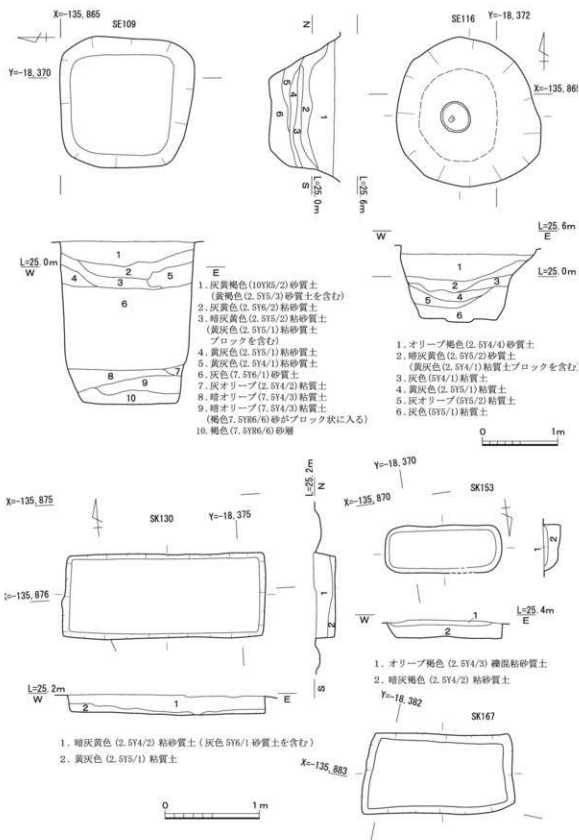
3. 検出遺構

(1) 中世(第36図)

井戸SE109(第33図) 平面形が方形を呈する井戸跡で、調査区北辺で検出した。井戸枠等の内部施設やその痕跡を検出することはできなかった。井戸の底部は礫層に達しており、水脈まで到達していたと思われる。礫層部分やその上位の粘土質の地層などに水が溜まることによる



第32図 第10次第1遺構面遺構配置図



第33図 井戸SE109・116、土坑SK130・153実測図

挟り込みなどが顕著に認められないことから、本来は井戸枠等の内部施設があり、廃棄時に丁寧に抜き取られたものと考えられる。出土遺物には土師器皿・瓦器椀・灰軸陶器(第40図1～5)があり、13世紀後葉のものが中心である。井戸の一辺の長さは1.7m、深さは2.2mを測る。

井戸SE116(第33図) 調査区北辺のSE109の西側に隣接して検出した。平面形が円形を呈する井戸跡である。井戸の底部は湧水層となる礫層まで達することなくシルト質の層で終わっていることから、溜め井戸であった可能性が高い。井戸底部には直径40cmの円形の落ち込みがあり、曲物が据えられていた可能性もある。出土遺物には土師器皿・瓦器椀(第40図6～9)がある。井戸の直径は2m、深さは1mを測る。

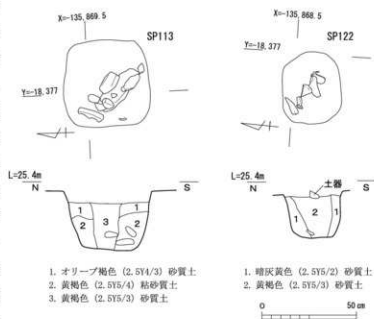
土坑SK130(第33図) 耕作溝群を検出した面を、重機掘削によって下げた時点で検出した長方形の土坑である。平面形から土塚墓の可能性も認められたので、慎重に棺痕跡の検出に努めたが確認できなかった。土坑の長軸はほぼ真東西方向を向き、周辺の地割と同じである。出土遺物はなく、時期は不明である。長辺2.1m、短辺0.9m、深さ20cmを測る。

土坑SK153(第33図) 調査区北側で検出した隅丸長方形の土坑である。出土遺物はなく遺構の年代は不明であるが、他の長方形の土坑が中世に造られた可能性が高いことから、中世のものとみとく。土坑の長辺は1.2m、短辺0.5m、深さ20cmを測る。

土坑SK167(第33図) 耕作溝群と同じ面で検出した長方形を呈する土坑である。平面形から土塚墓の可能性も考えられ、慎重に棺痕跡の検出に努めたが確認できなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。長辺は1.5m、短辺0.9m、深さ20cmを測る。

坪境溝SD02(第35図) SD02を検出した調査区南側ではすでに第1遺構面検出時に、もともと他の場所より高くなっており、すでに下位の遺構面まで削られていた。そのため第1遺構面測量時にはSD01を残すため掘削を行わず、重機による下層への掘り下げ時に、南端部はすでに

下層が露呈しており他の下層の遺構と一緒に掘削を進めた。多くの遺物が出土したが、その多くが検出した溝の東側で出土した。出土遺物には土師器皿・瓦器皿・瓦器椀・白磁椀・土師質の羽釜などがある。土師器皿や瓦器椀は完形率が高く、その場で廃棄されたような出土状態であったが、白磁椀や羽釜についてはそうではない。遺物は12世紀末～13世紀初頭のもので、後述の耕作溝群よりも古い時期のものである。溝の幅約3m、深



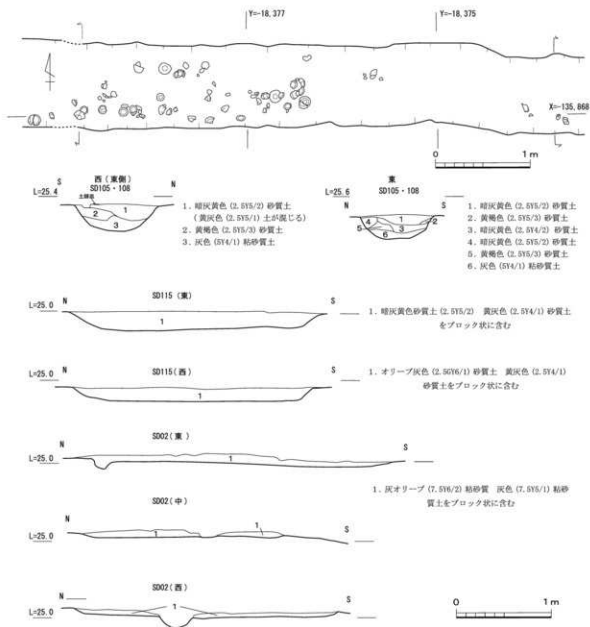
第34図 柱穴SP113・122実測図

さ約10cm、検出長は15mを測る。

柱穴SP91 中央部付近で、耕作溝群検出面で検出した柱穴跡である。平面形が円形で、中央部には土器片が立った状態で出土した。直径20cm、深さ25cmを測る。出土遺物には須恵器捏ね鉢がある。

柱穴SP113(第34図) 平面形が隅丸方形を呈し、掘形底部には礎板の代わりと考えられる板状の礫が据えられていた。柱掘形は一辺45cm、深さ30cmである。柱掘形内からは土師器皿・瓦器椀・須恵器捏ね鉢が出土している。13世紀後葉の年代が与えられる。

柱穴SP122(第34図) 平面形が隅丸長方形を呈する柱跡である。柱掘形は長辺40cm、短辺30cm、深さ25cmである。出土遺物には土師質の羽釜、土師器皿があり、羽釜が柱抜き取り後に



第35図 溝S D02・105・108・115実測図

投入されたもので、土師器皿は掘形内からの出土である。

溝SD115 中世耕作溝面を1段掘り下げて検出した幅の広い溝で、東端が調査区内で終わる形状を示す。出土遺物はほとんどなく、瓦器片があるだけであるが、混入の可能性もあり時期は特定できない。埋土に薄い砂層を挟むなど中世の溝群との類似性から、中世に位置づけた。溝の主軸は西で4°北に振り、検出長13m、幅2.5m、深さ20cmを測る。

耕作溝群(第32図)

調査区の中央部から南部にかけて、東西および南北方向の耕作溝を多数検出した。調査区北側では耕作溝はかなりまばらになる。遺構の切り合い関係から、東西方向の溝より南北方向の溝が新しいことがわかる。溝の埋土には、細粒の砂層を挟んでいる特徴が認められる。この耕作溝群については、時期の判明するものを取り上げて説明する。

溝SD01 調査区南端で検出した東西方向の耕作溝である。坪境溝SD02の中央部に穿たれたもので、他の溝に比べ深く、坪境溝を踏襲した溝の可能性が指摘できる。幅約0.2～0.4m、深さ約0.5～0.9m、検出長は12.2mを測る。土師器皿・瓦器碗などが出土している(第41図18～34・74)。13世紀後半頃の遺構である。

溝SD04 調査区南端で検出した東西方向の耕作溝である。SD01の北側に平行して検出した。幅約0.2～0.4m、深さ約0.2～0.4m、検出長は7.1mを測る。土師器皿・瓦器碗などが出土している(第42図78～84・88)。13世紀後半頃の遺構である。

溝SD05 調査区南端で検出した東西方向の耕作溝である。SD01・04の北側に平行して検出した。幅約0.1～0.3m、深さ約0.2～0.3m、検出長は10.5mを測る。

溝SD09 調査区南端部で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.2m、深さ約0.1m、検出長8.9mを測る。土師器皿が出土している(第42図85)。

溝SD10 調査区南端部で検出した東西方向の耕作溝である。SD09の北側に平行しており、東端で合流している。幅約0.35～0.65m、深さ約10～30cm、検出長12.5mを測る。土師器皿が出土している(第42図86)。

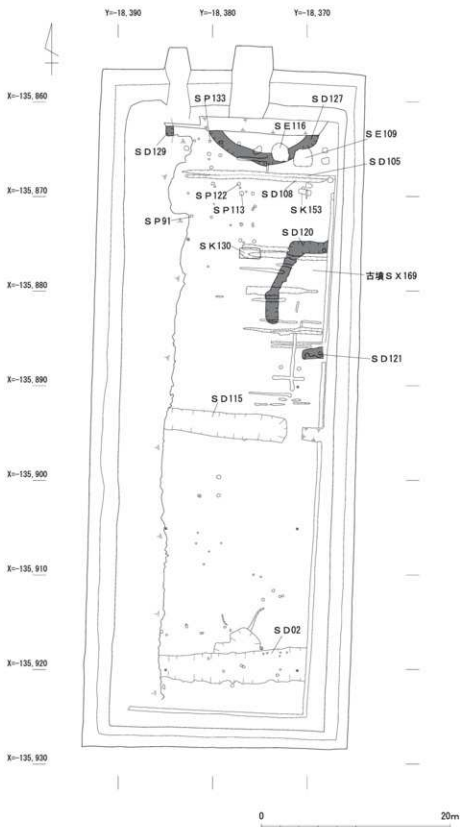
溝SD13 調査区中央部で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.3～0.7m、深さ約10～40cm、検出長は13.3mを測る。土師器皿が出土している(第42図87)。

溝SD19 調査区中央部西よりで検出した南北方向の耕作溝である。幅約0.25～0.6m、深さ約10～20cm、検出長20.5mを測る。瓦器碗が出土している(第42図91)。

溝SD27 調査区中央部西よりで検出した南北方向の耕作溝である。SD19のすぐ東隣にあり、北がだんだんと東側にひろがっている。幅約0.25m、深さ約10～20cm、検出長19.3mをはかる。瓦質の鉢が出土している(第42図94)。

溝SD44 調査区中央部で検出した東西方向の耕作溝である。SD13とほぼ平行している。幅約0.35m、深さ約20～40cm、検出長13.7mを測る。

溝SD50 調査区中央部で検出した東西方向の耕作溝で、SD27に切られている。幅約0.3～0.5m、深さ約10～cm、検出長は10.2mを測る。古瀬戸灰軸碗が出土している(第42図95)。



第36図 第10次第2遺構面遺構配置図

溝SD64 調査区南側で検出した東西方向の耕作溝である。SD09、SD10にはほぼ平行している幅約0.15～0.3m、深さ約30～50cm、検出長12.8mを測る。須恵器蓋が出土した(第42図104)。

溝SD74 調査区中央部で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.5m、深さ約50cm、検出長約1.8mを測る。瓦器椀が出土している(第42図99)。

溝SD79 調査区北側で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.4～0.6m、深さ約10～60cm、検出長7.8mを測る。青磁椀高台が出土している(第42図93)。

溝SD84 調査区北端部東よりで検出した南北方向の耕作溝である。幅約0.2m、深さ約10～40cm、検出長10.4mを測る。瓦質挿鉢が出土している(第42図105)。

溝SD89 調査区北端部西よりで検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.5m、深さ約80cm、検出長2.1mを測る。瓦器椀が出土している(第42図100)。

溝SD94 調査区北端部で検出した東西方向の耕作溝である。幅約0.4m、深さ約20～30cm、検出長1.5mを測る。瓦器椀が出土している(第42図101)。

溝SD105・108(第36図) 調査区北端部で検出した東西方向の溝である。他の溝と同じような「U」字状の形状を示すが、SD105とSD108は近接して掘られたのち1本の溝として機能したようである。そのため2つの溝の前後関係は不明である。土師器の皿と瓦器椀が完全な形でまどまって出土した(第35図)。土師質の羽釜の破片と考えられるものは2つの溝がそれぞれ独立していた時期の堆積土からの出土した。皿・椀などの残存状態や出土量が多の遺構に比べて良好であるため、耕作溝というよりも生活空間を区画した溝の可能性が高い。幅約0.4m、深さ約25cm、検出長1.5mを測る。土師器皿・瓦器椀が出土している(第42図106～142)。

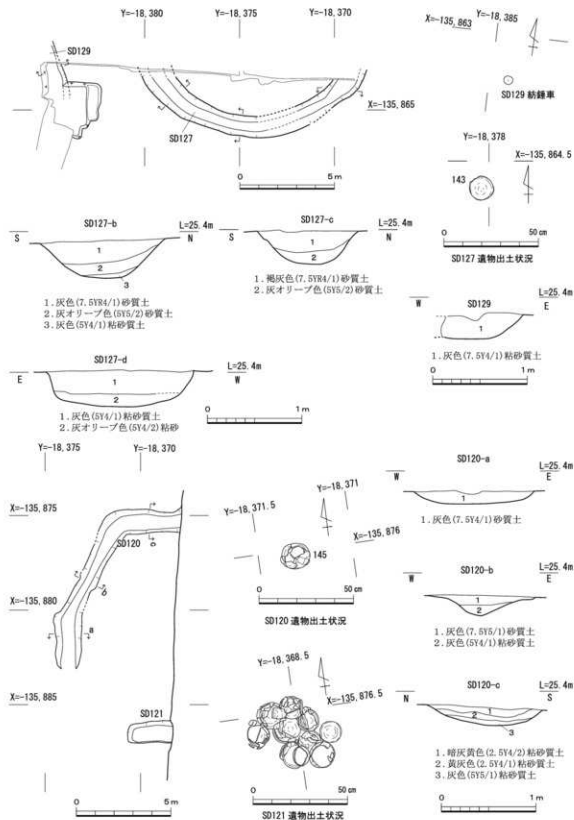
②古墳時代

古墳SX169(第37図) SD120・121で区画された古墳で、東半分が調査区外となる。検出した溝を反転すると八角形を呈するが、第9次調査では非常に変形した方墳を検出していることから、不整形な方墳ないし円墳と判断する。主体部は残存していなかった。

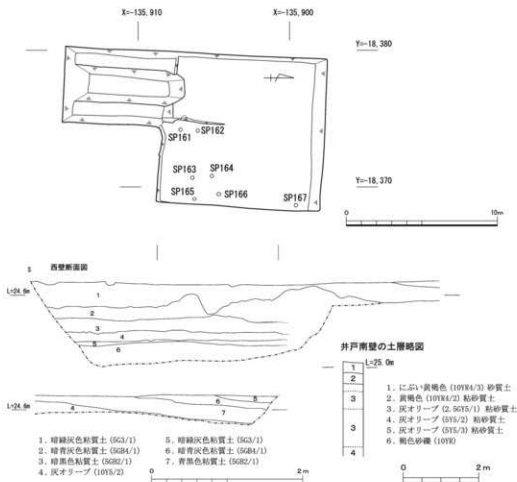
古墳周溝SD120(第37図) 古墳西側及び北側の溝である。角度が120°ほどの屈曲が2か所で確認できた。屈曲部中央で土師器壺(第43図145)が出土している。各辺の長さは、反時計回りで北から3m、5.5m、2mで幅は1.3m、深さ25cmを測る。

古墳周溝SD121(第37図) SD120が南部で削平されて途絶えているが、南辺の中で深い部分が発出されたものと考えられる。西側は浅くなり途切れ、東側は調査区外に延びる。溝中央部では須恵器杯身・杯蓋を主体とする土器が集積して出土した。杯身と杯蓋は正位置で出土し、組み合わされているものが多かった。そのほかに甕、土師器壺があった(第43図144・146～162)。溝の検出長は約2.5m、幅1.1m、深さ10cmを測る。

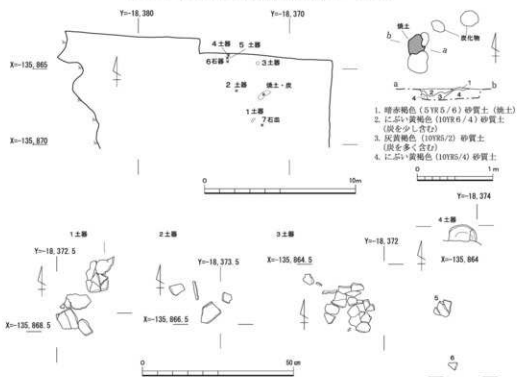
古墳周溝SD127(第37図) 調査区北側で検出した円弧状の溝で、第9次調査で検出した円墳SX1の南側周溝に当たる。出土遺物には土師器鉢がある(第43図143)。SX1の直径は約11mになる。周溝の断面は「U」字状を呈し、幅1m、深さ40cmを測る。



第37図 溝SD120・121実測図



第38図 縄文時代文化層確認調査区平・断面図



第39図 縄文土器出土状況図

古墳周溝 S D 129(第37図) 調査区北西隅で検出した溝である。埋土の色調や形状から古墳の周溝と考えた。第6次調査で検出されていないことから直径10m以下の古墳と考えられる。溝内部からは紡錘車が出土している(第46図193)。検出長2m、幅1m以上、深さ25cmである。

③縄文時代

縄文時代の遺物は、調査地北側で第2遺構面を精査中に他の時代の遺物と共に出土していた。そのため、北側についてはさらに15cmほど掘削し遺構精査を試みたところ、第38・39図で示したように、土器や石器が標高25.1m付近で張り付いたような状態で検出できた。中には焼土もあり、土器も外面が下側になるように残存していたことから、縄文時代の生活面または遺構の床面である可能性も想定された。縄文土器はいずれも晩期のものと判断される。

第38図は層位の項で述べたように、下層の土層・遺構の有無を確認するためのサブトレンチで認められた炭化物の凝集層(第7層下部)の性格を明らかにする目的で、10×10mの面的な調査を行うためのトレンチと5×7mの下層の土層観察用の深掘りをしたトレンチを接続して設けた。西壁の土層観察では、北に向かって地層の堆積が下がっていくことがわかり、ラミナ状の堆積を見せる部分や砂層が含まれていることが観察された。地層は部分によって粒度や色調が異なっている。第2層上面が傾斜していく部分で焼土を検出した。その層理面を精査したところ、中世の遺構埋土をもつ数か所の杭跡を検出しただけで、遺構・遺物は検出できなかった。焼土については性格が不明であるが、炭粒を含む部分が遺跡内の同層位に全体的に広がることから、人工的な火入れや自然に発生した野火の可能性が指摘できる。調査区北部の縄文時代遺構検出面よりは下位に位置づけられる。

4. 出土遺物

①中世

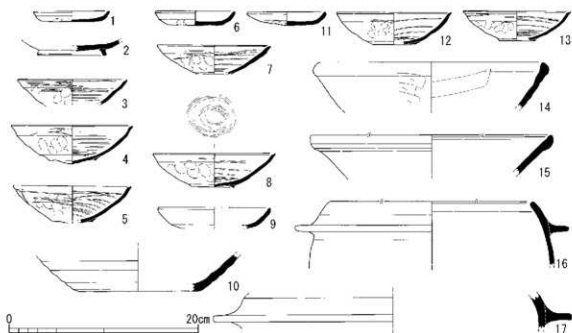
井戸 S E 109(第40図1～5) 1は土師器の皿である。2は灰軸陶器の椀底部である。他の遺物より古いもので混入と考えられる。3～5は大和型瓦器椀である。いずれも13世紀中頃の年代が与えられる。

井戸 S E 116(第40図6～8) 6は土師器皿である。7・8は瓦器椀である。いずれも13世紀中頃の年代が与えられる。

柱穴 S P 91(第40図10・14) 10は東播系須恵器片口鉢の底部である。14は東播系の須恵器片口鉢の口縁部である。12世紀末から13世紀初頭の年代が位置づけられる。

柱穴 S P 113(第40図9・12・13・15・16) 9は土師器皿である。12・13は瓦器椀である。15は須恵器片口鉢口縁部である。16は土師器の羽釜である。S P 122の破片と接合する。鈔下面から胴部外面は煤によって黒色を呈する。胎土には直径4mm以下のチャート・石英・長石の砂粒を含む。

柱穴 S P 122(第40図11・17) 11は土師器皿である。17は土師器の羽釜である。胎土には直径5mm以下のチャート・石英・長石の砂粒を含む。



第40図 井戸及び柱穴出土遺物実測図

溝SD01(第41図18～34・74) 18～23は土師器皿である。18は口縁端部が外反し、深い器形を示す。胎土も他の土師器皿に比べ白く色調や胎土が異なる。24は瓦器皿である。25～34は大和型の瓦器椀である。74は上面に布目、下面に縄タキをもつ瓦片である。

溝SD02(第41図35～73・75～77) 35～50は土師器皿である。51～54は瓦器皿である。55は白磁碗底部である。56～71は大和型瓦器椀である。72は土師器甕の口縁部である。73・75～77は土師器の羽釜である。73・76・77は直径3mm以下の石英・長石・雲母を含み、75は直径3mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含む。

溝SD04(第42図78～84・88) 78～80・83は土師器皿である。82は瓦器皿である。81・84は瓦器椀である。88は東播系須恵器片口鉢の口縁部である。

溝SD09(第42図85) 85は土師器皿である。

溝SD10(第42図86) 86は土師器皿である。

溝SD12(第42図89) 89は土師器甕口縁部である。

溝SD13(第42図87) 87は土師器皿である。

溝SD19(第42図91) 91は瓦器椀底部で、摩滅のため内外面の調整は不明である。

溝SD27(第42図94) 94は瓦質の鉢口縁部である。

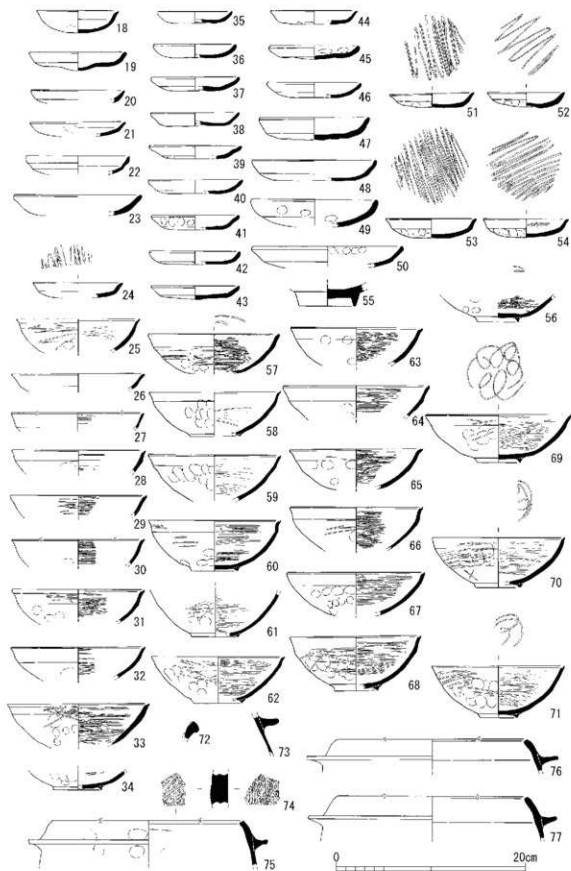
溝SD41(第42図98) 98は土師器皿である。

溝SD44(第42図92) 92は須恵器鉢口縁部である。

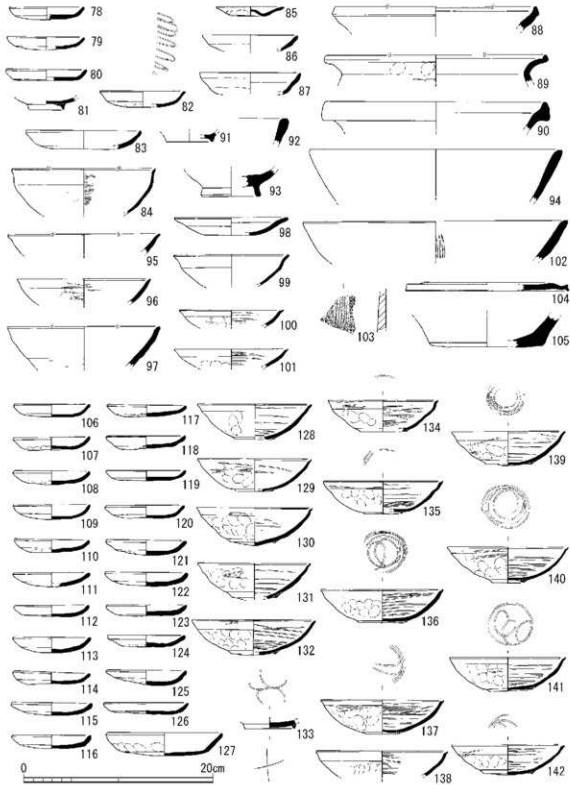
溝SD50(第42図95) 95は古瀬戸灰釉椀である。

溝SD56(第42図90) 90は東播系須恵器片口鉢の口縁部である。

溝SD64(第42図104) 104は須恵器蓋である。平安時代中頃以前の遺物で、同時期の遺物は瓦を除いてほとんど出土していない。



第41図 地境溝SD01・02出土遺物実測図



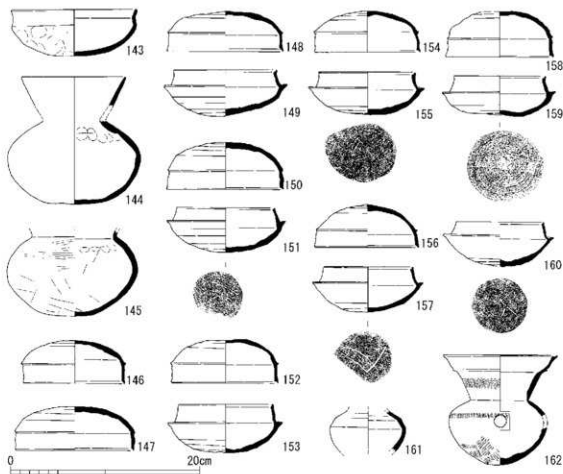
第42図 耕作溝群出土遺物実測図

溝SD67(第42図102) 102は土師質の播鉢である。播り目が3条見られる。

溝SD73(第42図96) 96は大和型瓦器椀である。

溝SD74(第42図99) 99は大和型瓦器椀である。

溝SD75(第42図103) 103は土師質の播鉢片である。



第43図 古墳周溝出土遺物実測図

- 溝SD79(第42図93) 93は青磁碗の高台部分である。
 溝SD84(第42図105) 105は瓦質播鉢の底部である。
 溝SD89(第42図100) 100は大和型瓦器碗である。
 溝SD94(第42図101) 101は大和型瓦器碗である。
 溝SD99(第42図97) 97は古瀬戸灰軸碗である。
 溝SD105・108(第42図106～142) 106～127は土師器皿である。128～142は大和型瓦器碗である。

②古墳時代

溝SD120(第43図145) 145は土師器の壺胴部である。調整は外面下半部がケズリ、上半部がハケのちナデで、内面はケズリのちナデである。胎土には最大径が4mm程度の長石・石英・チャート・赤褐色斑粒を含み、色調は橙色(2.5YR7/6)である。

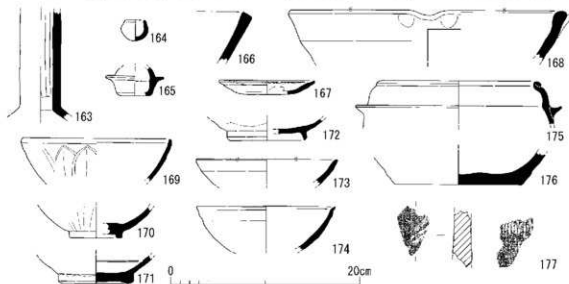
溝SD121(第43図144・146～162) 144は土師器の壺胴部である。内外面の調整は、表面の剥離のため不明である。胎土には最大径が3mm程度の長石・石英・チャート・赤褐色斑粒を含み、色調は橙色(2.5YR7/6)である。146は完全な形で出土した須恵器杯蓋である。口径は10.8cmである。147は須恵器杯蓋で159に被さるように大きな破片が覆った状態で検出された。口径は12.3cmである。148は149と口縁を合わせた状態で、正位置を保って出土した杯蓋である。杯身とは焼成

や胎土、受け部の大きさが異なるが、蓋としてかみ合うことは可能である。口径は12.3cmである。149は148と対になる須恵器杯身である。口径は10.6cmである。150は土器群中央部分から151と組み合わされた正位置の状態で見えられた。151の受け部に対して口径が大きい。口径は12.5cmである。151は150と対になる杯身である。底部には横一文字の櫛描が施される。口径は10.4cmである。152は153と組み合わされた正位置の状態で見えられた須恵器蓋である。153の受け部裾が152の口径よりも大きく、被せることは可能であるが、完全にはかみ合わない。口径は11.3cmである。153は須恵器杯身である。152と対をなす。154は155の下位に重なって口縁を上にした状況で出土した須恵器杯蓋である。口径は11.2cmである。155は154の上に重なって出土した須恵器杯身である。155の上には160の胴部が重なる。口径は9.7cmで、154の杯身蓋とは正しく組み合わせ、胎土・焼成も類似している。底部には3本の直線を交差させたヘラ描が施される。156は157と正位置で組み合わされた状態で出土した須恵器杯蓋である。口径は11.0cmである。157は156と対になる須恵器杯身で、底部外面には一筆によるヘラ描きが施される。口径は9.7cmである。158は159と組み合わされて、正位置の状態で見えられた須恵器蓋である。口径は11.5cmである。159は158と対をなす須恵器杯身である。底部外面には一筆でヘラ描きが施され、形状は157のものに似ている。口径は9.8cmである。160は正位置で出土した須恵器の杯身である。底部には「く」字状の線分と直線を組み合わせたヘラ描きが施されている。口径は9.3cmである。162は須恵器甕である。頸部外面には6条を単位とした櫛描波状文が施され、胴部肩には4個を1単位とする列点文が施文される。底部以外は回転横ナデ、底部はタタキの後、ナデ調整である。161は重機掘削時にS D121検出面で出土した須恵器甕胴部である。1片の破片のみで他の破片は出土していない。

溝S D127(第43図143) 143は土師器の鉢である。口縁部は強い横ナデのため外反する。色調は橙色(2.5YR7/6)を呈し、直径2mm以下の長石・赤褐色斑粒・雲母を含む。

包含層出土土器(第44図163～177:縄文土器を除く)

163は弥生時代後期の高杯脚部である。この時期の遺物はこの脚部のみである。外面の調整は

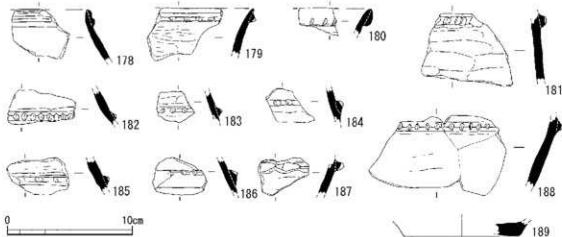


第44図 包含層出土遺物実測図

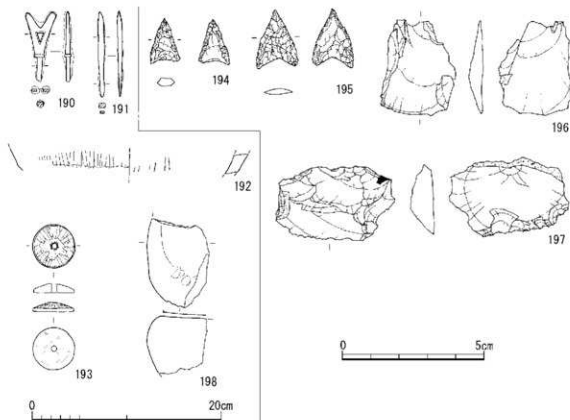
不明で、内面はケズリである。胎土には径4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・赤色斑粒を含む。164は調査区東壁精査中に出土した土師質の手捏ねの鉢である。時期は不明であるが、胎土に目立った砂粒が含まれず、色調が中世の土師器皿と酷似している。165は土師質のミニチュア羽釜である。内外面ともにナデ調整で直径3mm以下の角張った長石・石英の砂粒を含む。166は瓦質の鉢口縁部である。14世紀以降の年代が与えられる。167は遺構精査中に出土した土師器皿である。口縁部には灯明皿として使用された痕跡が残る。168は遺構精査中に出土した信楽焼片口鉢である。14世紀の年代が与えられる。169は調査区北側の第1遺構面精査中に出土した龍泉窯系青磁碗の口縁部である。170は調査区の北部で重機掘削中に出土した龍泉窯系青磁碗の高台部である。171は重機掘削中に出土した白磁碗の底部である。172は灰軸陶器碗の底部である。体部外面にはツケガケによる施軸が施され、内面は軸葉が剥落する。見込み部分及び外面には施軸されない。10世紀前半に位置図けられる猿投折戸53号窯に併行するものと考えられる。173・174は古瀬戸灰軸碗の口縁部である。175は土師質の羽釜口縁部である。直径3mm以下の石英・長石・雲母を含む。176は信楽焼捏鉢または播鉢の底部である。内面は使用によると考えられる摩滅のため平滑である。177は平瓦片である。

③縄文土器(第45図178～189)

178は古墳周溝S D127出土の縄文時代晩期の船橋式土器深鉢口縁部である。胎土には径3mm以下の石英・長石を含む。179は調査区北部の精査中に出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢口縁部である。胎土には径3mm以下の石英・長石・赤色斑粒を含む。180は深鉢口縁部である。胎土には石英・長石・雲母・角閃石を含む。181は調査区北側重機掘削中に検出した、縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部である。胎土には径4mm以下の石英・長石・雲母片を含む。182は188と同じ場所から出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径4mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む。183はS E109埋土から出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径3mm以下の石英・長石・雲母を含む。184は調査区の北部精査中に出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径3mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む。185はS E109埋土から出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径3mm



第45図 縄文土器実測図



第46図 鉄器・石器実測図

以下の石英・長石・雲母を含む。186は調査区の北部精査中に出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径3mm以下の石英・長石・雲母を含む。明確な角閃石は認められないが他の角閃石を含む個体と色調は同じである。187はS D127出土の縄文時代晩期船橋式土器の深鉢胴部で、胎土には径6mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む。188は調査区北部で出土した縄文時代晩期の船橋式土器深鉢胴部で、胎土には径6mm以下の石英・長石・雲母・角閃石を含む。189は縄文土器底部である。4土器(第39図)の部分から出土した。

④鉄器(第46図) 190は包含層出土の鉄鍔である。先端部が2つに分れた雁又形で、中央部には逆三角形の透かしが設けられる。全長7.9mm、最大幅3.2cmを測る。191は棒状の鉄製品で、中央部で太さが異なる。錆が深く及んでおり正確な形状は不明であるが、長頭鍔と考えられる。現存長9cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測る。

⑤石器・石製品(第46図) 192はS D105出土の滑石製石錐の胴部である。内面は平滑に仕上げられているが、外面は鑿跡が残り、煤が付着する。193は古墳周溝S D129内から出土した滑石製紡錘車である。上面の傾斜部には削った痕が放射状に残される。

以下で述べるサヌカイト製石器はすべて古墳の周溝であるS D127掘削中に出土した。194・195は包含層出土の平基無茎のサヌカイト製石鍔である。194は全長2cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmで、195は全長1.5cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmである。196・197は自然面打面から作り出された横長剥片の先端部を背面からの2次加工によって刃を付けたサヌカイト製の削器である。197は全長2.6cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。196はサヌカイト製の剥片で腹・背面ともに打痕の発達

乏しく、打面部が線状であることから、両極打法による剥片と考えられる。全長3.3cm、幅2.5cm、厚さ0.4cmである。198は花崗岩製の石皿片である。使用された面は中心に近い部分に向かってくぼむように緩やかに彎曲し、平滑である。

4. 小結

①調査区中央部分を中心に中世の耕作溝を多数検出した。出土遺物には瓦器碗や土師器などがあるが、いずれも小片で意図的に投棄された状況ではなかった。遺物は平安時代から14世紀までのものが含まれている。

溝には南北方向のものと東西方向のものが存在し、重複関係から南北方向のものが新しい。南北方向の溝には、その溝の向きから約2.7m間隔に対になって掘削されたことがわかる。こうした状況から、東西方向の溝もまた同じように作られたことが対になる溝の特徴から類推される。

溝はそれぞれ詳しく調査すると、鍬や鍬を打ち込んだ痕跡が底面に残され、人力による掘削であることがわかる。

②調査区南側で坪境溝を検出した。検出した最も古い溝は、12世紀末から13世紀初頭の供膳具を中心とする土器群が投棄された土砂で埋まっており、その上に1段階新しい遺物を含む溝が掘られていた。鳥島部分にも溝が確認でき、洪水や人為的な土地の改変を受けても地割が踏襲されてきた様子が明らかになった。

③平安時代の10世紀中葉の大型掘立建物群が第9次調査地で発見されているが、今回の調査地では遺物を含め、同時代の遺構は検出できなかった。今回の調査地は大型の建物の近くに位置するにも関わらず、同時期の遺物が存在しないのは、調査区中央部に見られる地層の鞍部が洪水によって形成されたもので、それ以前の遺物や遺構を洗い流したためと考えられる。その時期に関しては14世紀以前ということしか判らない。

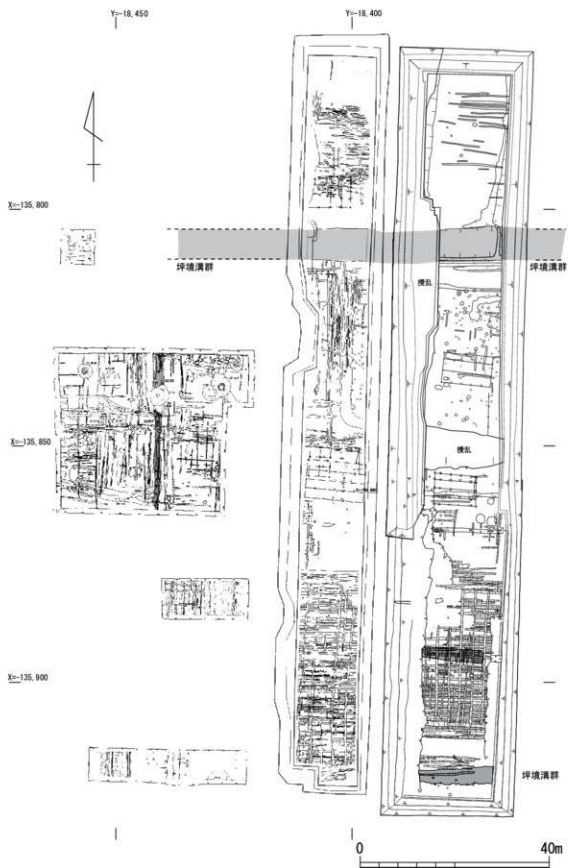
④古墳を3基検出したが、南に行くほどその残存状態が悪い。前述したように鞍部に向かうに従い、周溝の残存状態が悪くなることとなる。主体部はすでに削平のため残されていない。

⑤今回の調査では縄文時代の遺構は検出できなかったが、北側の第9次調査隣接地では、遺構検出可能な面が存在することが確認できた。

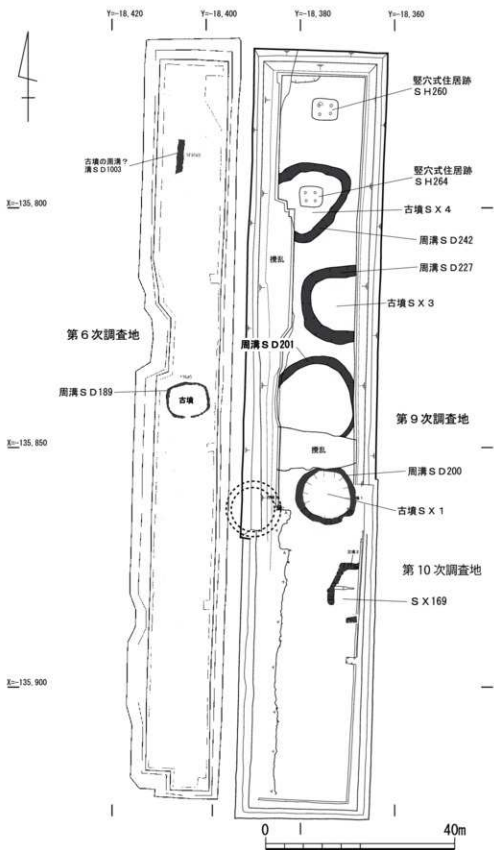
まとめ

第6次調査の報告でも述べられているように、木津川に隣接した当遺跡においては、洪水による削平や鳥島造成による削平などによって、必ずしもかつて存在していた遺構が残されていない可能性もあるが、第9次調査と第10次調査および第6次調査、第4次調査の結果をもとに現在明らかになったことをまとめていきたい。

調査区内では縄文時代後期以前と考えられる土器片が出土している。第6次調査では不定形な落ち込みなどが検出されているが、明確な遺構は検出されていない。縄文時代の明確な遺構は第9次調査S K134・154・155のいずれも縄文時代晩期の土坑である。そのうち1つは土器墓竈と考えられる深鉢の単体の出土であり、墓域として利用されていたことがわかる。



第47図 第4・6・9・10次平安時代・中世遺構平面図



第48図 第6・9・10次古墳時代遺構平面図

弥生時代前期は、第6次調査で検出された弥生時代後期の遺物を出す溝SD1001の下層溝内から、前期中葉以後のものと考えられるヘラ掘き沈線が施された甕の破片が出土している。第9次調査においても、同じ溝の西側延長部と考えられる溝SD265から弥生時代前期の貼り付け突帯を持つ壺の胴部などが出土しているが、いずれも中葉以後のものと考えられる。弥生時代前期の遺物は上記の溝に限定して出土している。土器量はいずれも極わずか、小破片であることから集落からは離れているものと想定される。

弥生時代中期後葉の土器は、第6次調査SD1002で後期の土器と一緒に出土している。SD1001ではまとまった後期の土器が出土しており、完形もしくは大きな破片のものが多い。

古墳時代前期の竪穴式住居跡2棟が第9次調査で発見されている。他に類似した時期の遺構は存在していない。古墳時代中期末のTK208～47併行期には古墳がつくられた。確かに古墳であると断定できるものは、第6次調査のSD189で区画された古墳、第9次調査のSX1～4、第10次調査のSD120・121で区画された古墳の6基である。攪乱によって溝の一部しか残されていない第6次調査のSD1003、同じく第10次調査のSD129によってそれぞれ区画されている2基を加えると、8基の古墳群が形成されていたことになり、椋ノ木古墳群と命名された。その中でも第6次調査のSD1003によって区画された古墳は、円筒埴輪・朝顔形埴輪を持っていたものと考えられる。また、第4次調査の5トレンチでは埴輪片が出土していることから、古墳群が北西方向に延びていたことが窺える。これらの古墳は木津川の自然堤防上に川とほぼ並行するように作られており、古墳ができた当時は、木津川の船中や対岸の地域からも眺められたものと考えられる。こうした立地からも木津川の水運に携わった人物の古墳であると考えられる。

古墳時代後期から平安時代前期までは、遺物が若干出土する場合もあるが、きわめて出土量が少なく、瓦などの遺物に偏っている。こうした白鳳期から奈良時代の瓦も中世の遺構または包含層中からの出土で、具体的な生活痕跡は認められない。

平安時代中期の10世紀中葉に、大型の掘立柱建物である第6次調査地のSB01、第9次調査地のSB1・2が建てられる。第6次調査地のSB01は東西6間以上、南北2間の身舎に南北にそれぞれ庇の付く建物である。第9次調査のSB1は、4間×5間の東西棟で4面に庇を持ち、第6次調査地のSB01に向かって孫庇が延びる構造を持つ。この二つの建物は、北側の柱列を揃えて計画的に配置されている。

これらの掘立柱建物はいずれも北で東に4度程度振っており、この時期の建物の計画線が条里跡とわずかに異なっている。第10次調査で耕作溝群の下層で検出した溝SD115は同じ方位を示し、何らかの区画を窺わせるが、第6次調査では同じ位置で溝が存在しないため詳細は不明である。現存の畦は、椋ノ木遺跡周辺は東西方向の溝が東で北に4°振っており、平安時代の建物の振角と局所的に一致している。一方、これら建物は坪の1/2の場所から北側に展開しており条里を意識していたことも窺わせる。こうした整然と立てられた建物群は一般の集落とは考えられない。荘園を実効支配していた有力者の館として位置づけられるものと考えられる。

11世紀にはいると、2間×3間以下の小さな掘立柱建物が建てられるようになり、建物の方位

は真北を向き条里の地割と方向を同じくするようになる。

12世紀末には、10次調査で検出した埴境溝SD02が掘られており、12世末が現在のところ条里の起源を求める最古の遺構である。第6次調査では、詳細に北側の埴境溝が調査され、同じ場所での再掘削や、やや場所を移動した再掘削などが認められ、南側と異なり溝底面のレベルがあまり変わらない。これらの残された溝は14～15世紀のものである。掘削面の高さもそれほど変わらないと考えられることから、SD02と同じ時期の溝は再掘削のため破壊されたものと考えられる。条里の施工時期に関する情報をまとめると以下のようになる。

- ①条里は12世紀末には確実に存在する。
- ②11世紀の建物が地点が離れていても真南北の軸を持ち、条里地割と同じで条里施工がなされていた可能性は高い。
- ③10世紀中頃の建物が坪の1/2を意識していたとすれば、条里の施工がさらに遡ることも射程に入れる必要がある。
- ④13世紀後半には、井戸などの生活遺構が発見されるようになる。それに伴う建物については、同じ時期の柱穴は発見されているが、建物としてまとまらない。
- ⑤その後15世紀までの期間に、耕作溝群が作られ、こうした溝群が廃絶した後に島畠が作られた。

(中川和哉)

参考文献

- 森島康雄・伊賀高弘「椋ノ木遺跡平成7・8年度発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第81冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 森島康雄「椋ノ木遺跡平成9年度発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第85冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 藤井整・松尾史子「椋ノ木遺跡第4次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第101冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 河野一隆・近藤奈央「椋ノ木遺跡第5次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第105冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 森島康雄・石崎善久「椋ノ木遺跡第6次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第110冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- 高野陽子「椋ノ木遺跡第7次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第115冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 村田和弘「椋ノ木遺跡第8次発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第143冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 精華町史編さん委員会編『精華町史 史料篇Ⅰ』精華町 1989
- 精華町史編さん委員会編『精華町史 本文篇』精華町 1996

圖 版

(1) 1・5トレンチ空中写真
(西から)



(2) 2～4・6トレンチ空中写真
(上が北)



(3) 5トレンチ空中写真(上が北)





(1) 2・3トレンチ空中写真
(上が北)



(2) 2トレンチ西半部(東から)



(3) 土坑S K34・鋤先痕(北から)

(1) 3 トレンチ溝 S D03(南から)



(2) 4・6 トレンチ空中写真
(南から)



(3) 自然流路 N R 28 遺物出土状況
(南から)





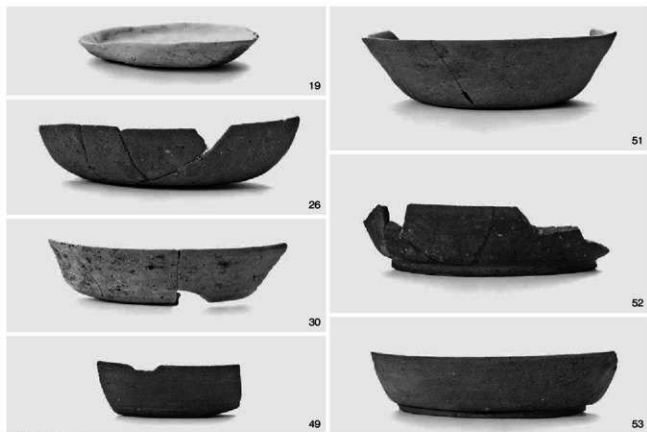
(1) 5 トレンチ溝 S D01(南から)



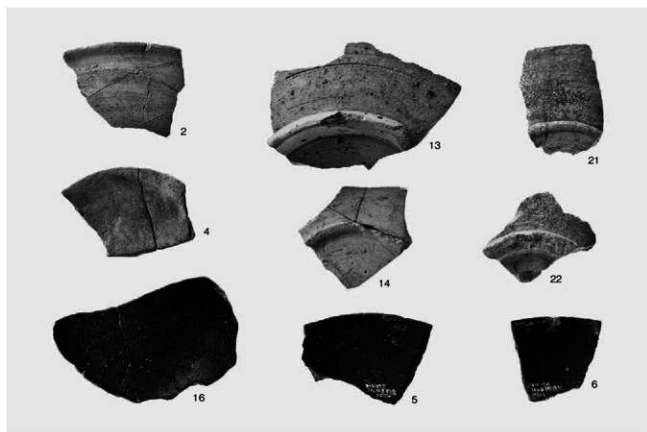
(2) 5 トレンチ溝 S D45~47と
牛足跡(南から)



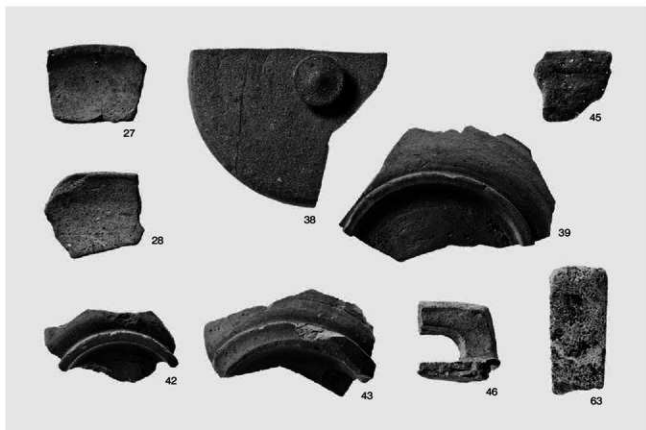
(3) 5 トレンチ水田遺構掘先痕・
稲株痕(東から)



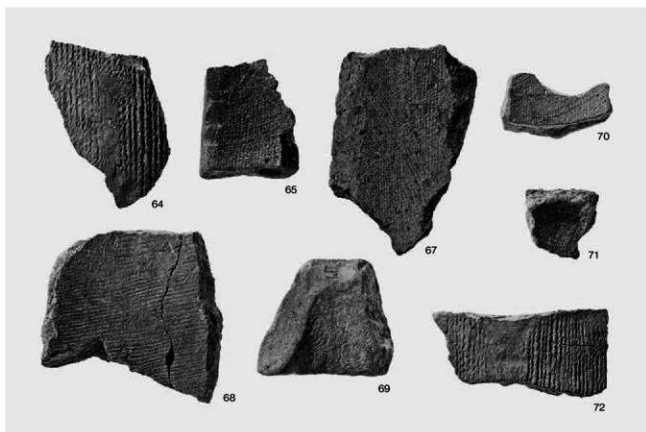
(1) 出土遺物 1



(2) 出土遺物 2



(1)出土遺物 3



(2)出土遺物 4



74



76



78



79



80



81



82



83



84



85



89



出土遺物 6



(1) 第9次第1遺構面全景(右が北)



(2) 第9次第2遺構面全景(右が北)



(1) 第9次調査前(北東から)



(2) 第9次第1遺構面北半部
遺構検出状況(南から)



(3) 第9次坪境溝群SD095
(西から)

(1) 第9次溝S D251五輪塔
出土状況(西から)



(2) 第9次土坑S K042
遺物出土状況(北から)



(3) 第9次土坑S K042
遺物出土状況(南から)





(1) 第9次第1遺構面南半部
遺構検出状況(北から)



(2) 第9次柱穴SP038
遺物出土状況(南から)



(3) 第9次掘立柱建物跡
SB1検出状況(東から)

(1) 第9次重機掘削
(第2遺構面まで、北西から)



(2) 第9次第2遺構面遺構検出作業
(北西から)



(3) 第9次古墳S X 1 全景
(南南東から)





(1) 第9次古墳S X 1周溝S D 200
(南東部)遺物出土状況
(北西から)



(2) 第9次古墳S X 1周溝S D 200
(西部)遺物出土状況(北から)



(3) 第9次古墳S X 1周溝S D 200
(西部)遺物出土状況(東から)

(1) 第9次古墳SX1周溝SD200
(北西部)遺物出土状況(南から)



(2) 第9次古墳SX2全景
(南東から)



(3) 第9次古墳SX2周溝SD201
(北東部)遺物出土状況
(北北西から)





(1) 第9次古墳S X 3全景
(南東から)



(2) 第9次古墳S X 4全景(東から)



(3) 第9次竪穴式住居跡S H 260
全景(南から)

(1) 第9次竪穴式住居跡S H260
遺物出土状況(南から)



(2) 第9次竪穴式住居跡S H264
全景(北東から)



(3) 第9次溝S D265全景
(北西から)





(1) 第9次溝 S D265全景 (西から)



(2) 第9次溝 S D265土層断面①
(西から)

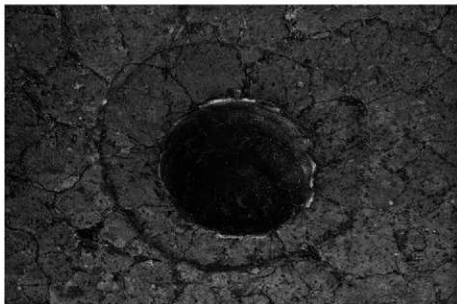


(3) 第9次溝 S D265土層断面②
(西から)

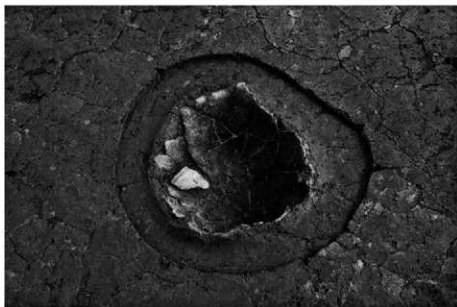
(1) 第9次溝S D265遺物出土状況
(西から)



(2) 第9次土坑S K154全景
(東から)



(3) 第9次土坑S K155全景
(東から)





(1) 第9次土坑SK134(上面)
(南東から)



(2) 第9次土坑SK134(下面)
(北から)



(3) 第9次第2遺構面全景(南から)



17



18



19



33



34



35



20



20



21



21



22



22



52



63



53



64



55



56



65



67



71



72



68



73



70



76



66



77



78



90



79



91



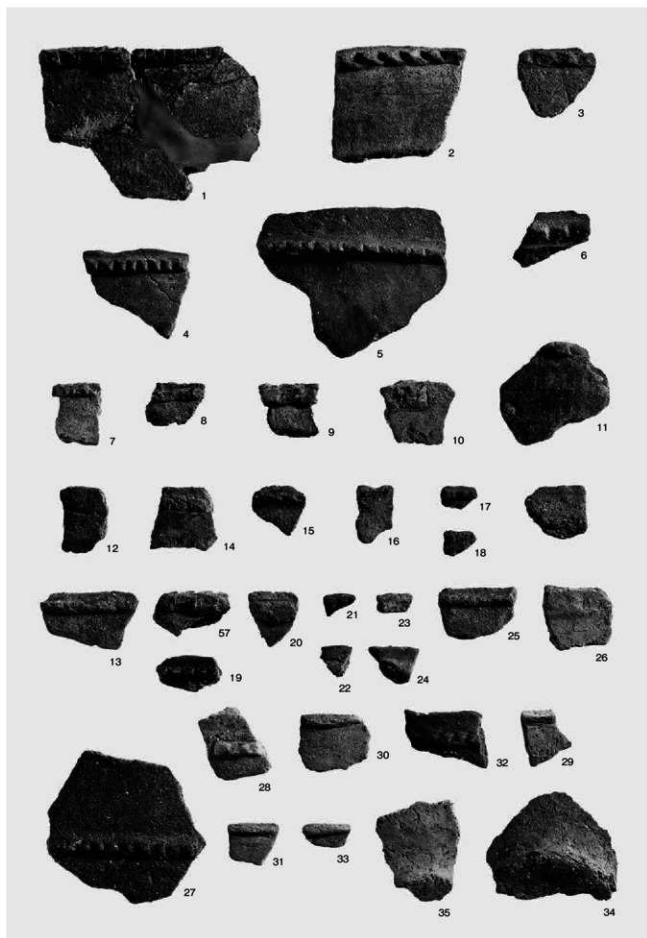
99



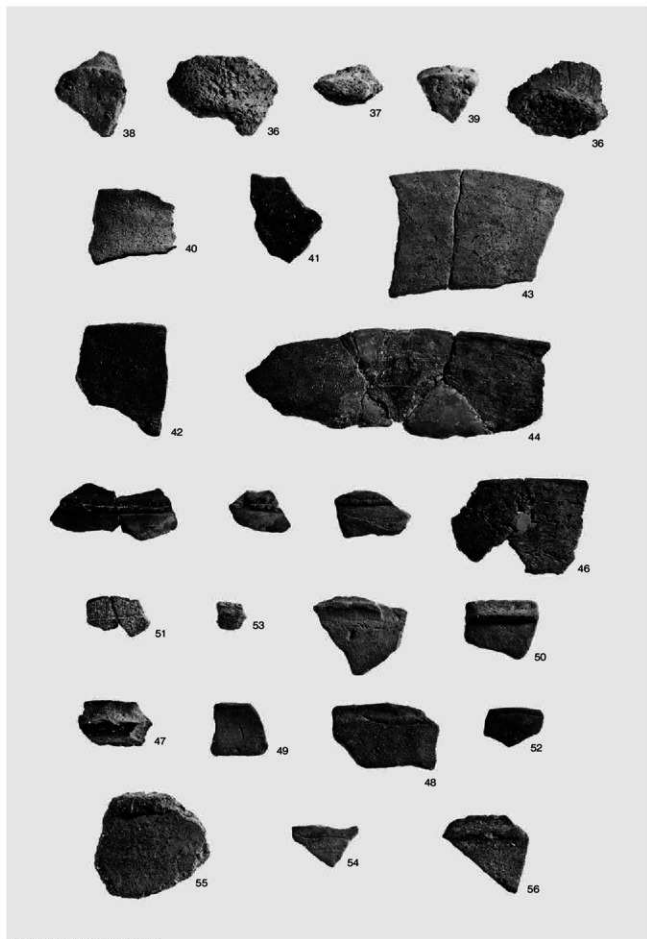
89



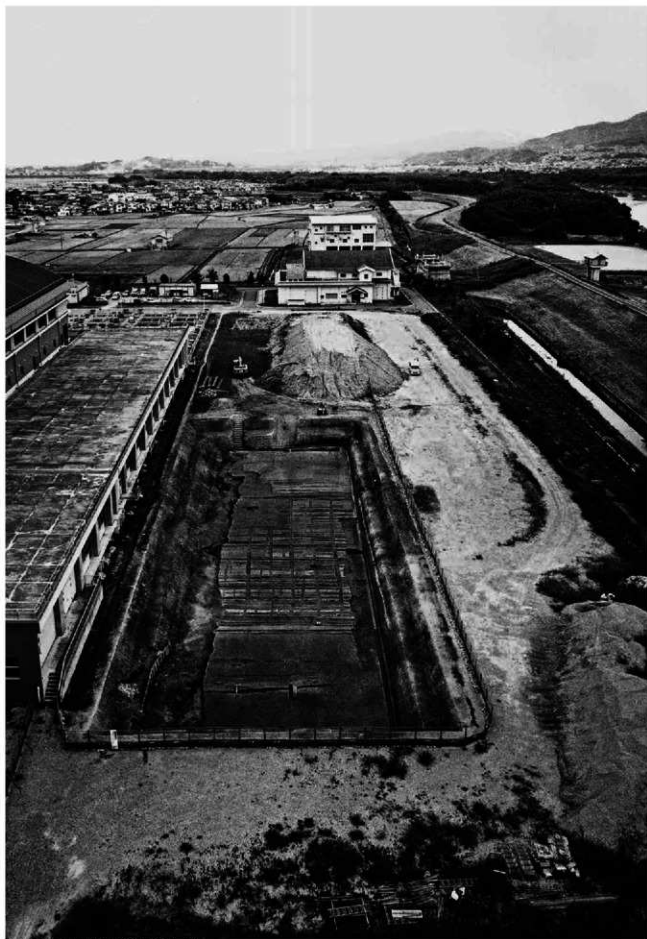
103



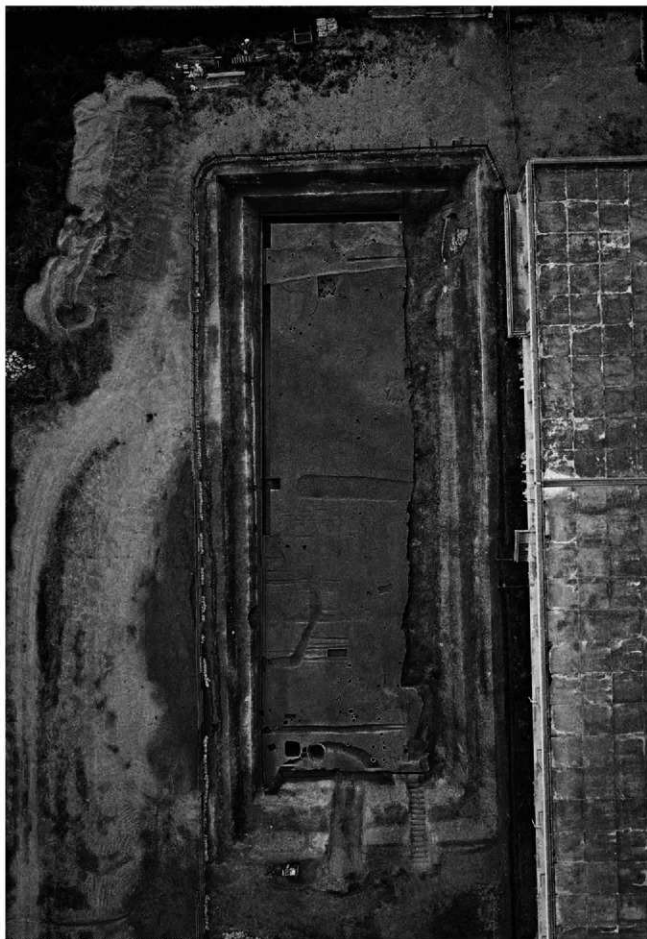
第9次出土遺物5(縄文土器)



第9次出土遺物6(縄文土器)



第10次調査第1遺構面全景(南から)



第10次調査第2遺構面全景(上が南)

(1) 第10次耕作溝群(西から)



(2) 第10次耕作溝群(南から)

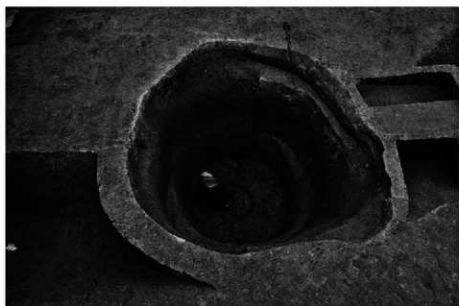


(3) 第10次溝 S D01(西から)

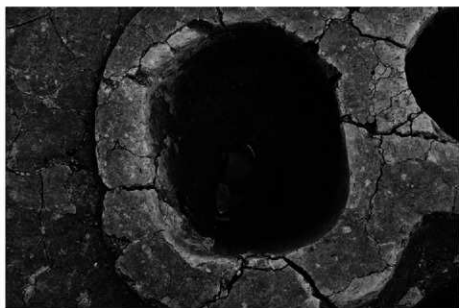




(1) 第10次調査区北部井戸跡
(東から)

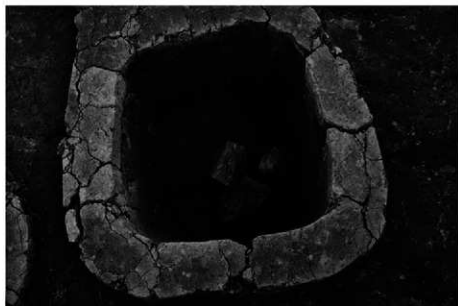


(2) 第10次井戸SE116(南から)



(3) 第10次柱穴SP113(西から)

(1) 第10次柱穴 S P 113(西から)



(2) 第10次柱穴 S P 122(西から)



(3) 第10次土坑 S K 166(南から)





(1) 第10次土坑 S K130(西から)



(2) 第10次土坑 S K153(南から)



(3) 第10次坪境溝 S D02(東から)

(1) 第10次坪境溝 S D02断面
(西から)



(2) 第10次坪境溝 S D02断面
(西から)



(3) 第10次溝 S D115(東から)





(1) 第10次溝 S D115(北から)



(2) 第10次溝 S D115断面(西から)



(3) 第10次溝 S D105・108
遺物出土状況(西から)

(1) 第10次溝 S D105・108断面
(東から)



(2) 第10次古墳周溝 S D127
(北から)



(3) 第10次古墳周溝 S D127
(東から)





(1) 第10次古墳周溝 S D127内遺物
出土状況(南東から)



(2) 第10次古墳周溝 S D127断面
(東から)



(3) 第10次古墳周溝 S D120・121
(北東から)

(1) 第10次古墳周溝 S D120・121
(西から)



(2) 第10次古墳周溝 S D121内遺物
出土状況(西から)



(3) 第10次古墳周溝 S D121内遺物
出土状況(南から)





(1) 第10次古墳周溝SD120内遺物
出土状況(南西から)



(2) 第10次古墳周溝SD120断面
(南西から)



(3) 第10次古墳周溝SD120断面
(西から)

(1) 第10次古墳周溝 S D129内遺物
出土状況(南から)



(2) 第10次第2遺構面確認調査区
(北から)



(3) 第10次第2遺構面確認調査区断
面(東から)





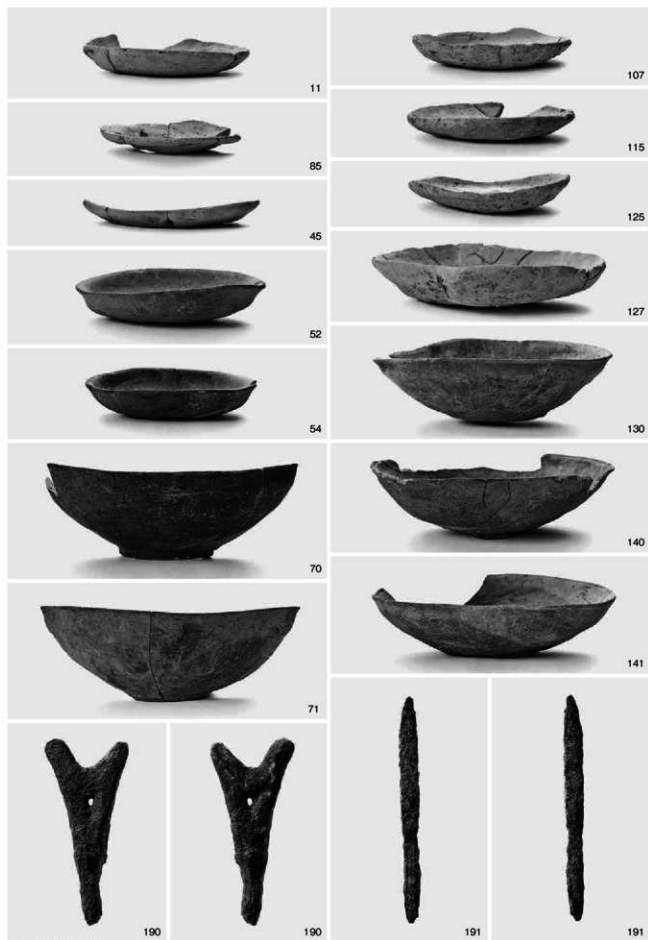
(1) 第10次第2遺構面確認調査区
断面焼土(西から)



(2) 第10次調査区南端土層確認用
サブトレンチ(西から)



(3) 第10次調査区北部縄文土器
出土状況(西から)





143



144



150



145



151



156



154



157



155



162



193

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第151冊
編著者名	
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡 番号				㎡	
こうといせきだい じゅうななじ 興戸遺跡第17次	きょうたなべしこ うどこもづめいち ばん、ななばんの いち 京田辺市興戸小 詰1番、7番の1	26211 29	34° 48' 45"	135° 46' 16"	20110610～ 20111006	600	庁舎建替
むくのきいせきだい いきゅう・じゅう じ 椋ノ木遺跡第9・ 10次	そうらくぐんせい かちょうおおあざ しもこまこあざむ くのき・かみのき ほか 相楽郡精華町大字 下狛小学椋ノ木・ 神ノ木他	26366 46	34° 46' 25"	135° 47' 54"	20111024 ～ 20111125	3,800	建物建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
興戸遺跡第17次	古墳 集落跡	古墳 奈良～平安 中世	溝・流路 溝・柱穴 溝・流路	土師器・須恵器・砥石 土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦 瓦器・瓦質土器・陶磁器	古山除・ 山陽併用 道に並走 する溝
椋ノ木遺跡第9・ 10次	集落跡	縄文 弥生 古墳 中世	溝・土坑 溝 古墳 溝・掘立柱建物跡	縄文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器 土師器・瓦器・陶磁器・五輪塔	後期古墳、 糸里制に 規制され た掘立柱 建物跡や 溝

所収遺跡名	要 約
興戸遺跡第17次	奈良時代の古山除・山陽併用道と並走すると考えられる溝や柱穴群を検出した。過去の調査成果により付近に公的な施設があったことが想定されているが、今回の調査で出土した布目瓦や灰釉陶器などはそれ関連する資料といえる。 また、古墳時代の流路から当該期の土器がまともって出土した。

椋ノ木遺跡第9・10次

今回の報告は第9・10次調査の2年度にわたる報告で、ともに遺構面を2面確認し、上層では平安～鎌倉時代の遺構、下面では縄文～古墳時代の遺構・遺物を検出した。縄文時代では、縄文時代晩期の土坑を検出し、うち1つは深鉢の単体の出土であり、土器棺墓と考えられる。そのほかに、後期以前と考えられる土器片が出土したが、同時期の明確な遺構は検出できなかった。弥生時代では、南北方向の溝を検出した。古墳時代前期の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡を検出し、中期末の古墳を新たに6基確認した。これまでの調査でみつかった古墳を合わせると8基となり、木津川の自然堤防上に多くの古墳が築かれていたことがわかった。また、これらの古墳や集落は、木津川とほぼ並行した自然堤防上に立地しており、木津川を上り下りする舟や川岸から眺められる位置にあることから、木津川の水運に携わった人物の古墳や集落であると考えられる。古墳時代後期から平安時代前期までは遺物が散発的に出土するが、出土量は極めて少なく、具体的な生活痕跡は認められない。

平安時代中期の大型の掘立柱建物跡2棟を検出し、広範囲に屋敷地が広がっている様相が明らかとなった。これらの建物は整然と立てられており、一般の集落とは異なり、荘園を実効支配していた有力者の館の可能性が指摘できる。11世紀には小規模な掘立柱建物が建てられるようになり、荘園の運営に変化があった可能性がある。12世紀末には条里地割に載る坪境溝があり、周辺の条里に関する最古の遺構とみられる。13世紀後半には井戸や柱穴などの生活遺構があり、その後、15世紀に至るまで耕作溝群が分布し、こうした溝群が廃絶した後に鳥島が作られている。

京都府遺跡調査報告集 第151冊

平成24年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141